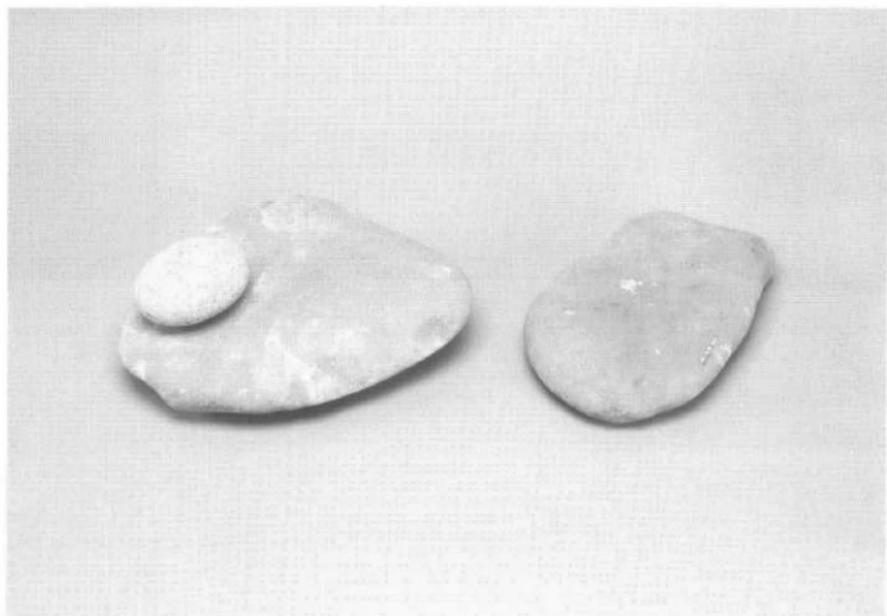
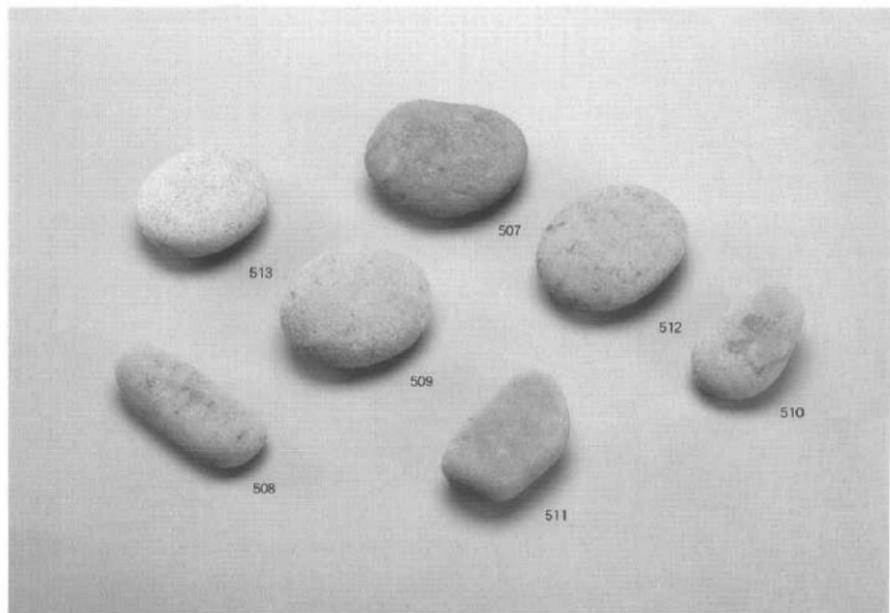


写真図版 35 縄文時代早期遺物包含層出土石器⑤



写真図版 36 縄文時代早期遺物包含層出土石器⑤

4th Period

第IV章 アカホヤ火山灰層上位についての調査

第1節 遺構

1. 集石遺構

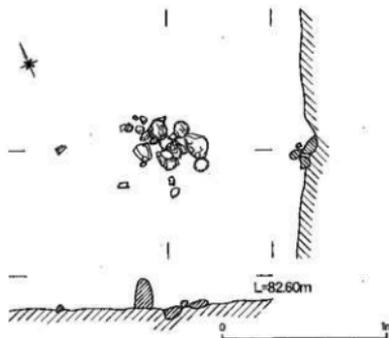
SI-1

アカホヤ火山灰層上面において、約 0.3 m²の円形の範囲に 24 個(総重量 10.5kg)の焼けた円礫や亜円礫、また角礫が集中している状態で検出された。使用時期は不明であるが、近隣の滑川第1遺跡では縄文時代前期から中期にかけての集石遺構が検出されているため、近い時期の集石遺構である可能性も考えられる。

2. 竪穴式住居跡

SA-1

第70図 SI-1「アカホヤ火山灰層上面検出」実測図 (S=1/30)



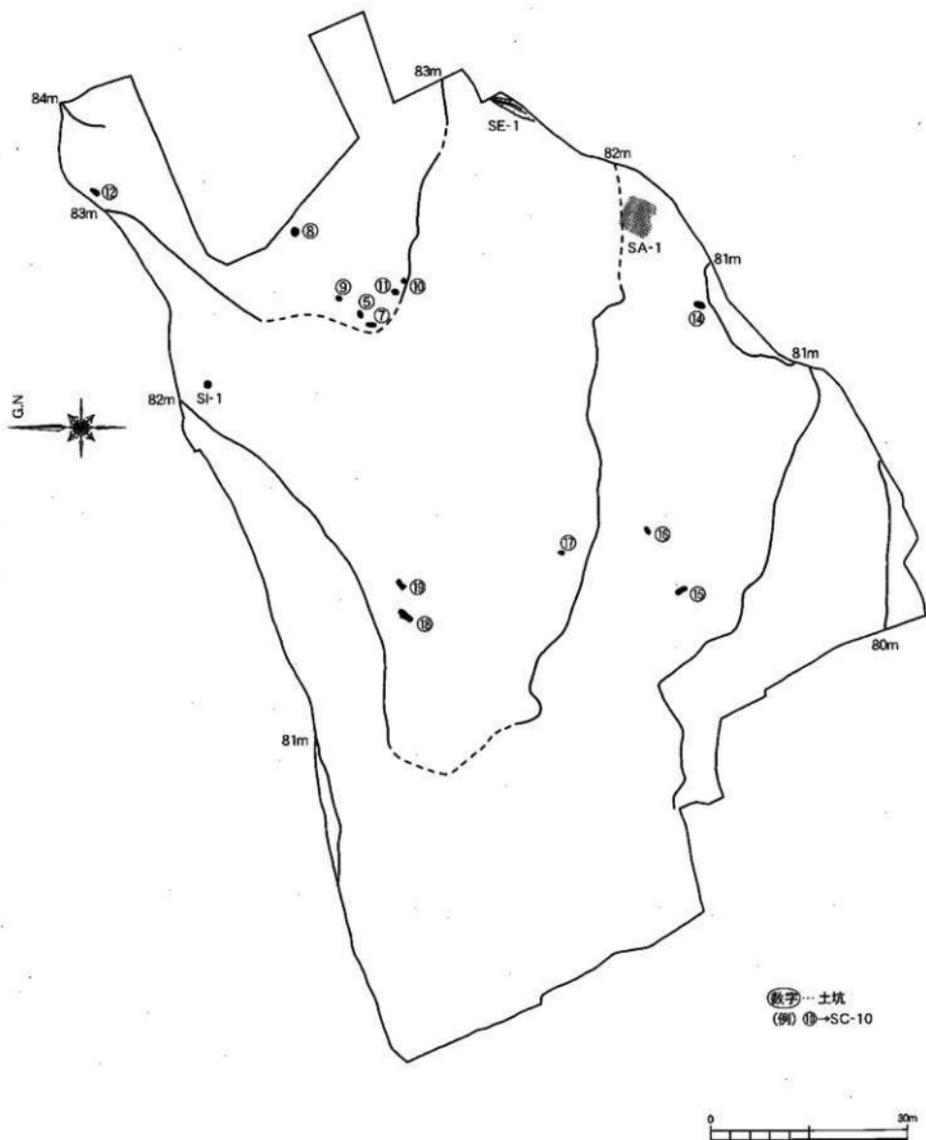
調査区の南東部、グリッドE-6に位置する。住居が所在する地点の地形は概ね平坦面である。住居の平面形態は隅丸正方形を呈する。規模は長軸 5.11m、短軸 5.04m、検出面から掘り込み面までの深さは 0.15m である。住居の残存状況はあまり良くなく、検出時には住居の南部分がすでに消失している状況であった。住居内からは柱穴が1基のみ検出された。柱穴の規模は長軸 0.55m、短軸 0.41mの不整楕円形で、深さは 0.48m である。また、住居中央部からは炉と思われる焼土・炭化物の集中箇所が検出された。さらに、この下からは長軸 1.60m、短軸 0.99mで不整楕円形を呈する掘り込みを確認したが、焼土や炭化物がこの掘り込みの床面から約 20cm 浮いた地点に水平に堆積していることや炉に伴う掘り込みにしては規模が大きすぎることなどから考えると、この掘り込みは炉に伴うものではなく、住居構築以前につくられた遺構である可能性が高いと判断した。

住居内からは縄文土器・弥生土器・石器が出土したが、このうち縄文土器についてはアカホヤ火山灰層下位の土器であり、住居に伴うものではない。遺物は埋土中からの出土がほとんどで、床面直上から出土した遺物も数点あったが、すべて図化できない程の小破片であった。1は広口壺の口縁部～胴部片である。やや反した口縁部をもつ。頸部は屈曲し、内面には明瞭な稜線を確認できる。調整は内外面ともナデである。2は壺の底部片である。底部形態は平底である。調整は内外面ともナデである。3は直頸壺の口縁部片である。口縁部はやや緩やかに反し、口唇部は凹面状に窪む。調整は外面が斜位のミガキ、内面がナデである。4は鉢の口縁部片である。緩やかに内湾する。調整は外面がナデ、内面が横位または斜位のミガキである。5・6は鉢の底部片である。いずれも平底で、調整は内外面ともナデである。いずれの土器も2～5mm程度の小礫を含む粗い胎土である。7は砂岩製の砥石である。板状を呈する。表裏面ともによく使用され、非常に平滑である。8・9は磨製石鏃である。いずれも凹基無茎式で、両面に細かな擦痕を残している。石材は8が頁岩、9が珪質岩である。また、8は先端部が欠損している。10は局部磨製石鏃である。凹基無茎式で、中央部は細かい擦痕が施されているが、縁部は剥離痕が残存している。11はチャート製の打製石鏃で、基部が欠損している。12は蛇紋岩製の管玉である。孔は両端面からの穿孔である。

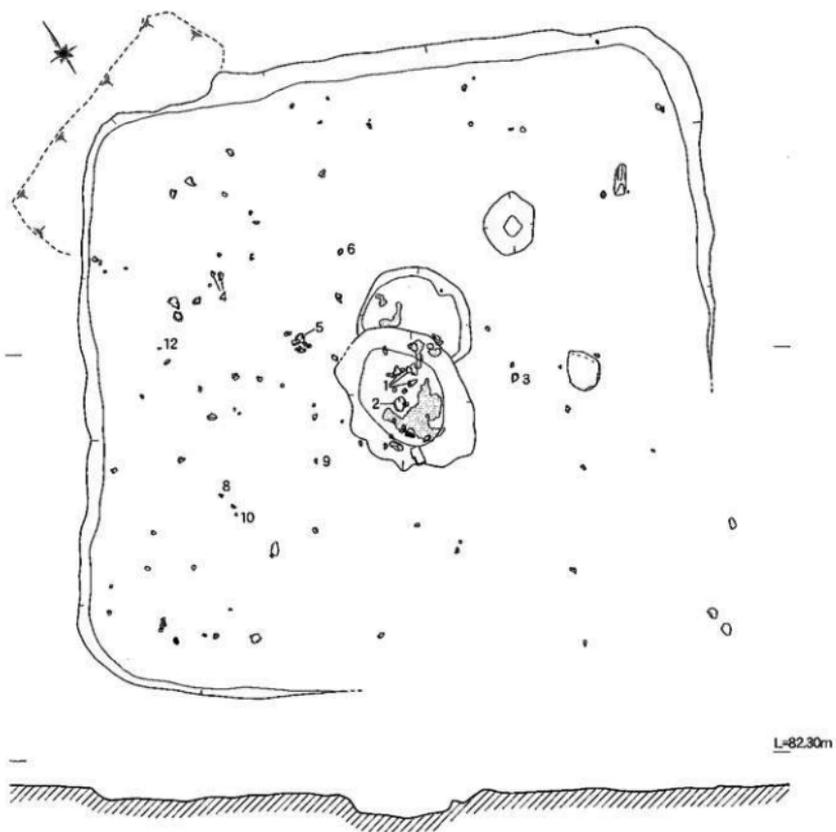
出土した土器の時期は土器の形態や器種構成から松永編年(註1)の2～3期、弥生時代後期中葉～後葉頃と考えられる。また、本住居のように焼土面が床面の中央部に位置するものは弥生時代後期前半以前に多くみられるが、弥生時代後期後半頃になると床面の北側に位置するものがみられるようになり、古墳時代前期初頭以降には北側にあるものが主流を占めるようになる(註2)。そのため、本住居は少なくとも弥生時代後期後半以前と考えられる。出土した土器の時期と焼土の位置から考えると、住居の時期については弥生時代後期中葉～後葉の時間幅の中で捉えておきたい。

註1 松永幸寿 2001 「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号 pp1～39 宮崎考古学会

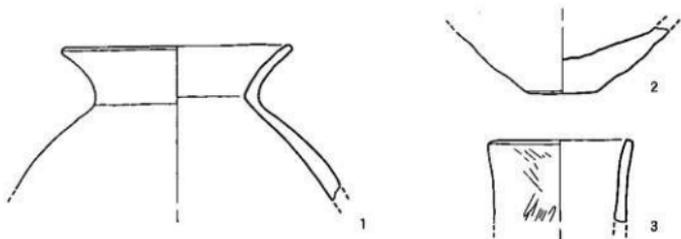
註2 石川俊雄 1991 「宮崎県における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』5 pp1～46 宮崎県



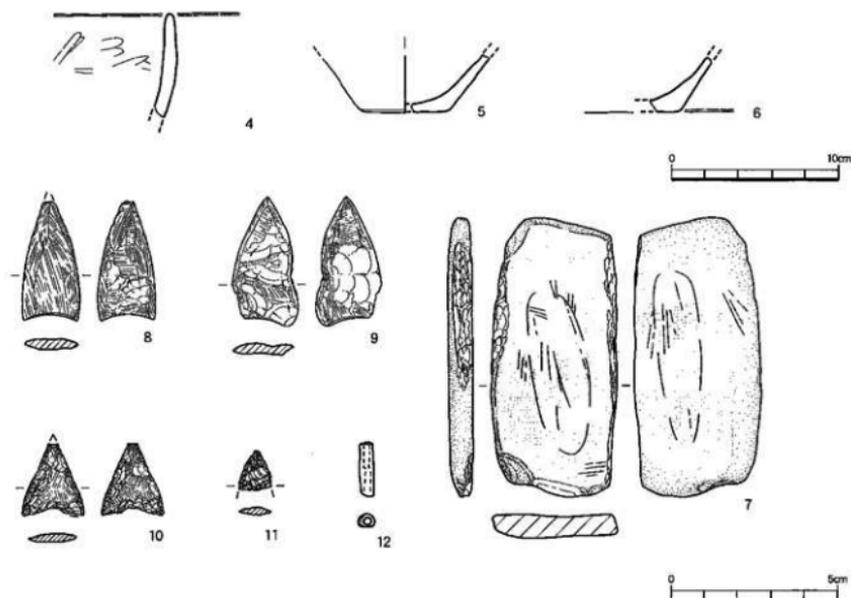
第71図 アカホヤ火山灰層上位検出遺構配置図 (S=1/750)



…焼土
 …炭化物



第72図 SA-1 実測図 (S=1/40) 及びSA-1 出土遺物実測図①(S=1/3)



第73図 SA-1 出土遺物実測図②(S=1/3-2/3)

第10表 SA-1 出土遺物観察表

No.	出土層位	器種	残存部位	文様及び調整		色調		法量 (cm)			備考	遺物整理No.
				外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高		
1	SA-1	壺	口縁~胴部	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	(13.2)			反転復元	439
2	SA-1	壺	底部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR4/1 赭灰		(4.4)		反転復元	937
3	SA-1	皿口蓋	口縁部	ミガキ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	(8.0)			反転復元	928
4	SA-1	鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙					929
5	SA-1	鉢	底部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい赤橙		(5.3)		反転復元	936
6	SA-1	鉢	底部	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙					930

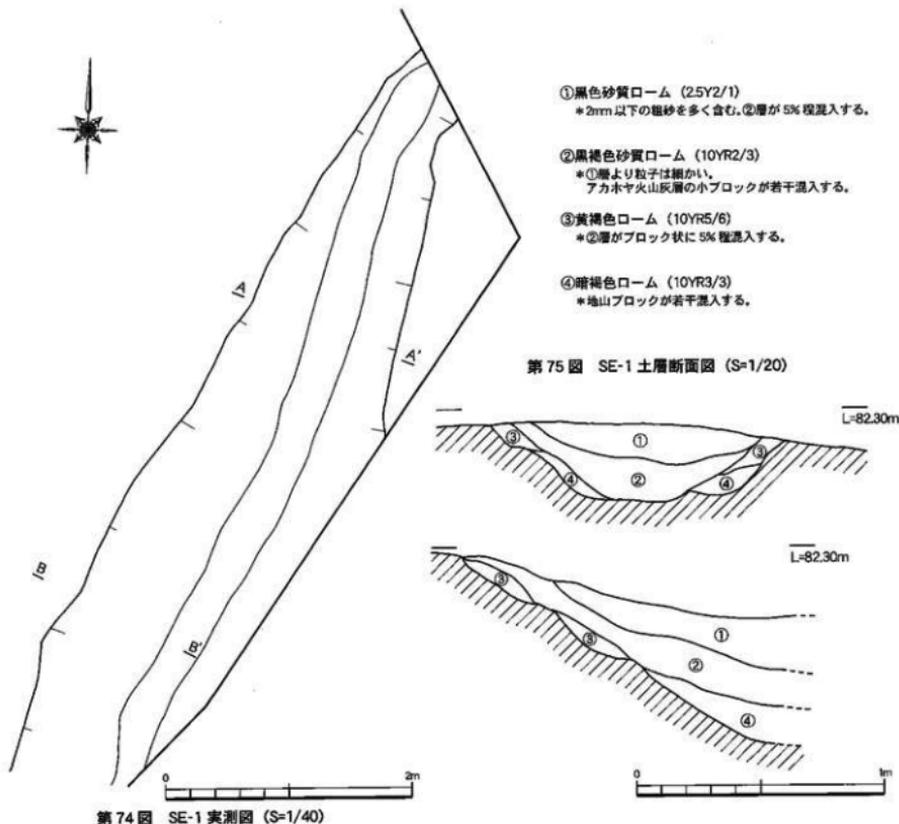
No.	遺構番号	器種	出土地点	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
7	190	砥石	SA-1	砂岩	8.55	3.8	0.8	43.5	
8	186	磨製石鏃	SA-1	頁岩	(3.65)	1.75	0.35	(2.9)	
9	185	磨製石鏃	SA-1	珪質岩	4.00	2.00	0.40	3.3	
10	187	磨製石鏃	SA-1	千枚岩?	(2.20)	1.90	0.25	(1.0)	
11	184	石鏃	SA-1	チャート	(1.20)	(1.00)	(0.30)	(0.28)	
12	1064	管玉	SA-1	蛇紋岩	1.7	0.4	0.4	0.3	

() の値は残存値を示す。

3. 溝状遺構

調査区東端で溝状遺構が1条(SE-1)検出された。埋土は下図のとおりであるが、埋土中からは弥生土器片・土師器片・焼礫などがあわせて数十点(多かったのは土師器片)出土している。ただし、いずれも埋土上位から中位にかけての出土で混在した状況であったため、今回は使用時期を考察する資料としては用いておらず、他に時期決定の根拠も確認できていないが、近隣の遺跡(上猪ノ原遺跡・下猪ノ原遺跡)で検出された溝状遺構とあわせて考えると古代から中世のものではないかと推測される。

尚、排水のためか区画のため、またその両方のためと溝状遺構が掘られた目的は幾つか想像できるが、それも今後他の遺跡の資料との比較検討が必要であり、遺跡が所在する当地地全体を視野に入れた考察が必要であろう。

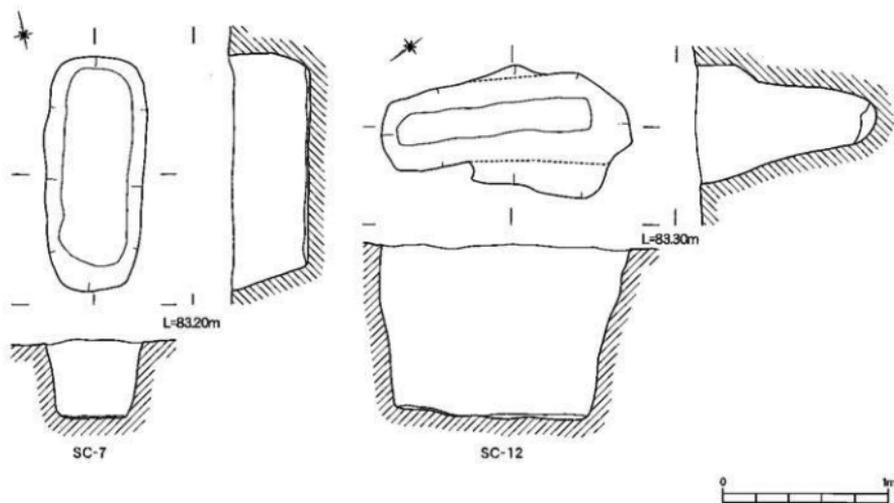


4. 土坑

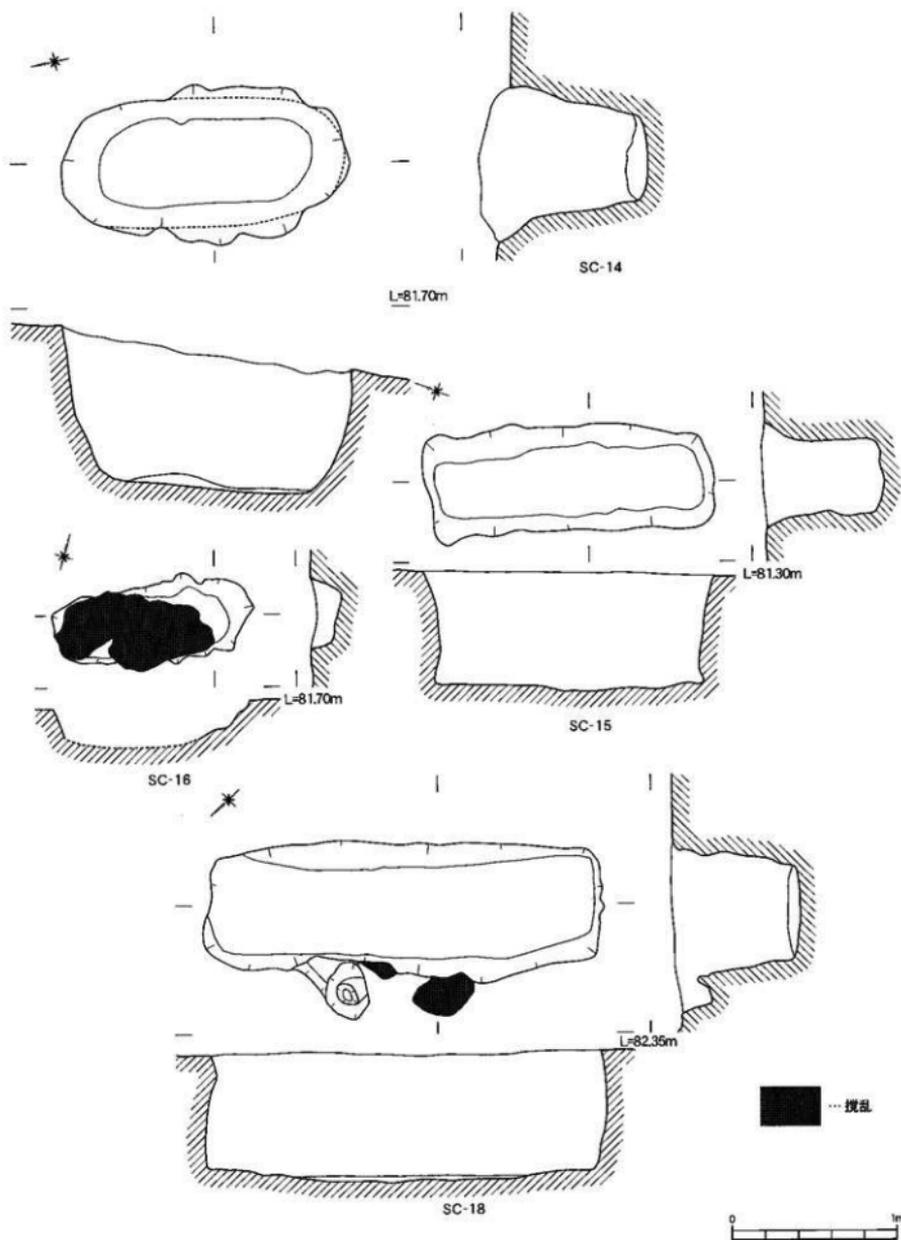
V層上面で計13基の土坑が検出された。いずれもアカホヤ火山灰降下後に構築された遺構で、本来はアカホヤ火山灰層上面で検出すべきであるが、プランの確認がかなり難しい状況であったためV層上面での検出に至った。

又、用途については貯蔵穴や墓など幾つか推測されるが、それを裏付けるような遺物は今回確認されていない。

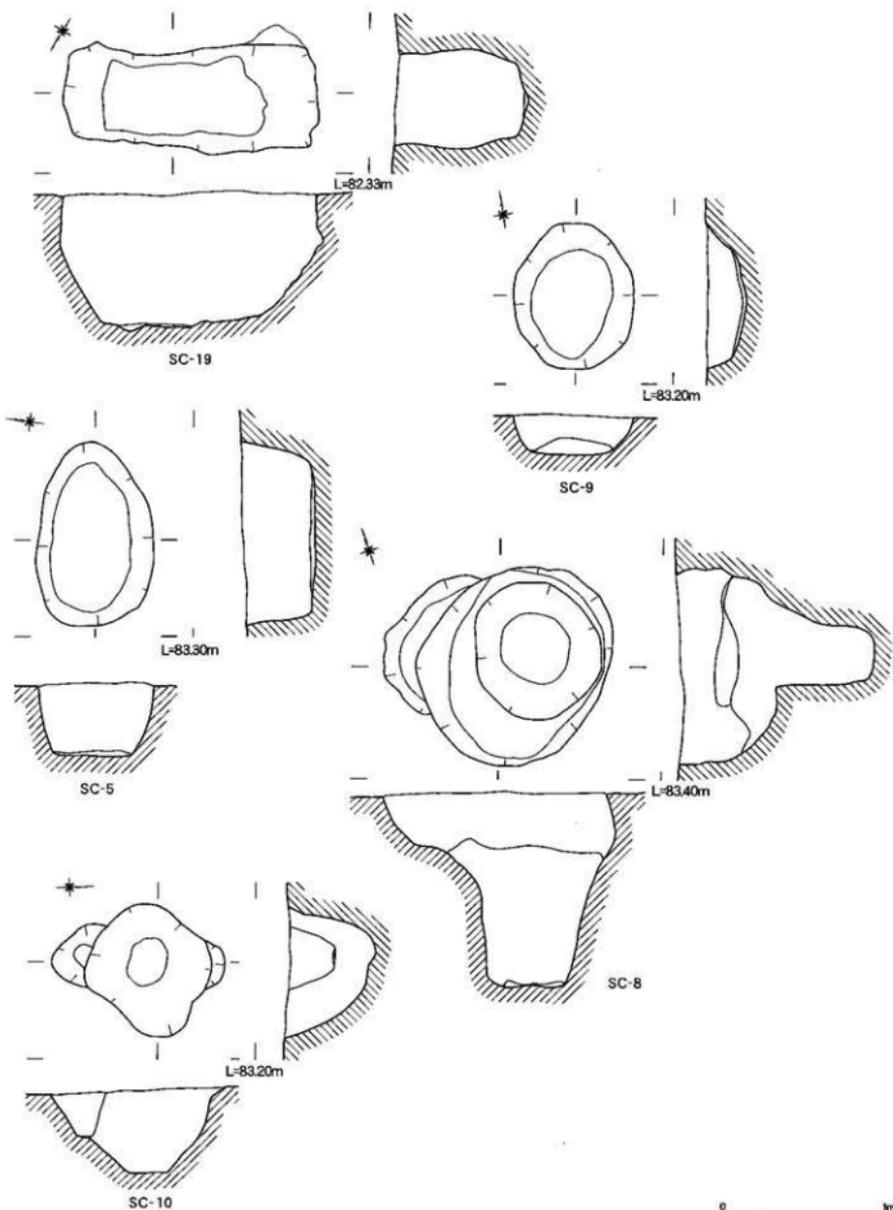
- SC-7 : 平面プランが長軸 1.45m、短軸 0.6mの隅丸長方形で、検出面からの深さは 0.5mである。埋土はアカホヤ火山灰小ブロックを含む軟質の黄褐色土である。
- SC-12 : 平面プランが長軸 1.5m、短軸 0.5mの隅丸長方形で、検出面からの深さは 1.05mである。埋土はアカホヤ火山灰小ブロックを含む軟質の黄褐色土である。
- SC-14 : 平面プランが長軸 1.75m、短軸 0.8mの長楕円形で、検出面からの深さは 1.0mである。埋土は軟質の褐色土である。
- SC-15 : 平面プランが長軸 1.8m、短軸 0.65mの隅丸長方形で、検出面からの深さは 0.7mである。埋土はアカホヤ火山灰小ブロックを含む軟質の黄褐色土である。
- SC-18 : 平面プランが長軸 2.4m、短軸 0.8mの隅丸長方形で、検出面からの深さは 0.8mである。埋土は軟質の褐色土である。
- SC-19 : 平面プランが長軸 1.55m、短軸 0.6mの隅丸長方形で、検出面からの深さは 0.8mである。埋土は軟質の褐色土である。
- SC-16 : 平面プランが長軸 1.2m、短軸 0.5mの楕円形で、検出面からの深さは 0.2mである（遺構の大部分が破壊されているため残存部分におけるデータ）。埋土は軟質の褐色土である。
- SC-5 : 平面プランが長軸 1.15m、短軸 0.7mの楕円形で、検出面からの深さは 0.45mである。埋土は軟質の黄色褐色土である。
- SC-8 : 平面プランが直径約 1.2mの円形（テラスを有する）で、検出面からの深さは 1.25mである。埋土は軟質の茶褐色土であるが、底部付近はやや粘性がある土質であった。
- SC-9 : 平面プランが長軸 0.9m、短軸 0.75mの楕円形で、検出面からの深さは 0.25mである。埋土は軟質の黄褐色土である。
- SC-10 : 平面プランが直径約 0.8mの円形（やや不整形）で、検出面からの深さは 0.5mである。埋土は軟質の茶褐色土である。
- SC-11 : 平面プランが直径約 0.8mの円形（不整形）で、検出面からの深さは 0.5mである。埋土は軟質の茶褐色土である。
- SC-17 : 滑川第1遺跡や山田第2遺跡でも検出されている端部にビットを有するタイプの土坑である。長楕円形の土坑（長軸 0.9m、短軸 0.6m、検出面からの深さ 0.15m）の端部に、円形のビット（直径約 0.2m、検出面からの深さ 0.8m）が切り合っている。



第76図 アカホヤ火山灰層上位検出土坑実測図①(S=1/30)

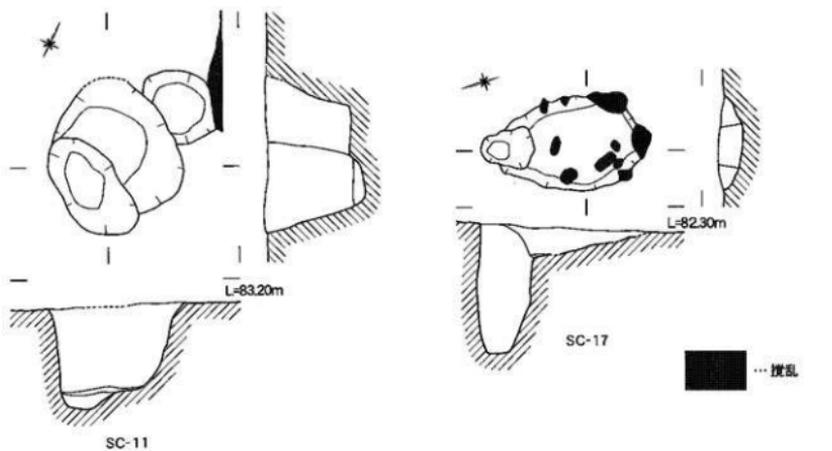


第 77 図 アカホヤ火山灰層上位検出土坑実測図②(S=1/30)

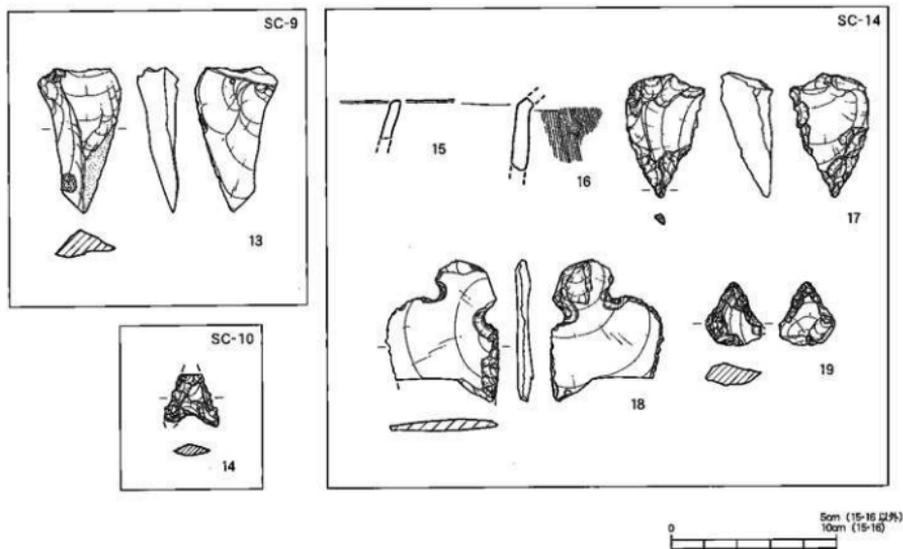


第 78 図 アカホヤ火山灰層上位検出土坑実測図③(S=1/30)





第 79 図 アカホヤ火山灰層上位検出土坑実測図④(S=1/30)



第 80 図 土坑内出土遺物実測図 (S=1/3-2/3)

第2節 包含層出土遺物

1. 縄文土器

アカホヤ火山灰層上位においては、Ⅲ層（通称2次アカ）が残存している区域から縄文土器が出土した。出土した縄文土器はそのほとんどが縄文時代前期のもので、極わずかに縄文時代後期や晩期のものも含まれていた。

貝殻条痕文土器・轟B式土器（1～42）

貝殻条痕文土器及び轟B式土器は437点出土し、そのうち42点を資料化している。

1は外面に貝殻条痕文を施した口縁部片で、2～12及び17・18は内外面に貝殻条痕文を施した胴部片である。13は外面に貝殻条痕文を施したあとナデ調整を行い（内面には貝殻条痕文を施している）、口唇部直下に棒状工具による刺突文を施した口縁部片である。14～16は内外面に貝殻条痕文を施した口縁部片で、15については口唇部にキザミを施している。又、1・14～16については、いずれも平口縁で口唇部がやや尖り気味に仕上げられている。尚、器形的特徴についてはいずれも小破片のため詳細は不明である。

19～42は地文に貝殻条痕文を施しそれに加え隆起帯文をもつ一群である。19～24は断面三角形の隆起帯文をもつ口縁部片及び胴部片で、隆起帯文は直線状や波状に施されている。口唇部の形状については、19～21は外面に斜行する平坦面を作りだしており、23は平らに仕上げている。25～42は直線状や波状、弧状に施された隆起帯文に刺突文を施した口縁部片及び胴部片で、施工具としては棒状工具（29～35・39～42）へら状工具（25・26・36～38）貝殻（27・28）などが考えられる。口唇部の形状については、25～27はやや尖り気味に28・30・31・35・38は平らに29・40～42は丸めに仕上げている。尚、器形的特徴についてはいずれも小破片のため詳細は不明である。

野口式土器（43～52）

野口式土器は45点出土し、そのうち10点を資料化している。

43～45は外面に細い棒状工具を使って弧状や直線状の沈線文を施した深鉢で、口唇部にはキザミを施している。46は地文に貝殻条痕文を施したあと外面に弧状の沈線文を施した口縁部片で、平らに仕上げた口唇部にも沈線文を施している。47については胎土及び施文の特徴からみて46と同形式の胴部片であることは間違いないであろう。又、48・49・51・52（胴部片）と50については、曾畑式土器に先行する土器群として今回はこの土器群のなかで紹介するが、胴部片はいずれも外面に弧状や直線状の沈線文を施しており、50はそれに加え内面にも沈線文をさらに平らに仕上げた口唇部にはキザミも施している。

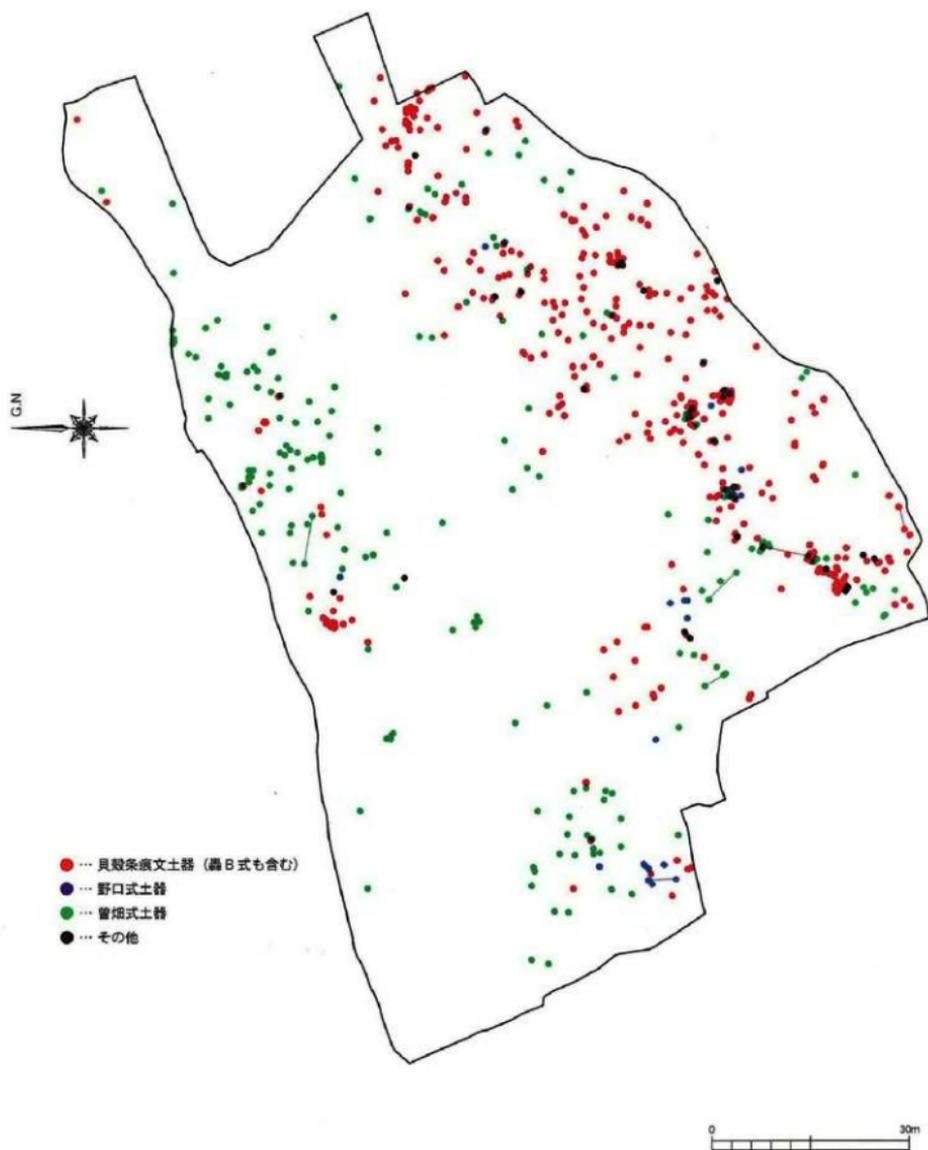
曾畑式土器（53～78）

曾畑式土器は215点出土し、そのうち26点を資料化している。

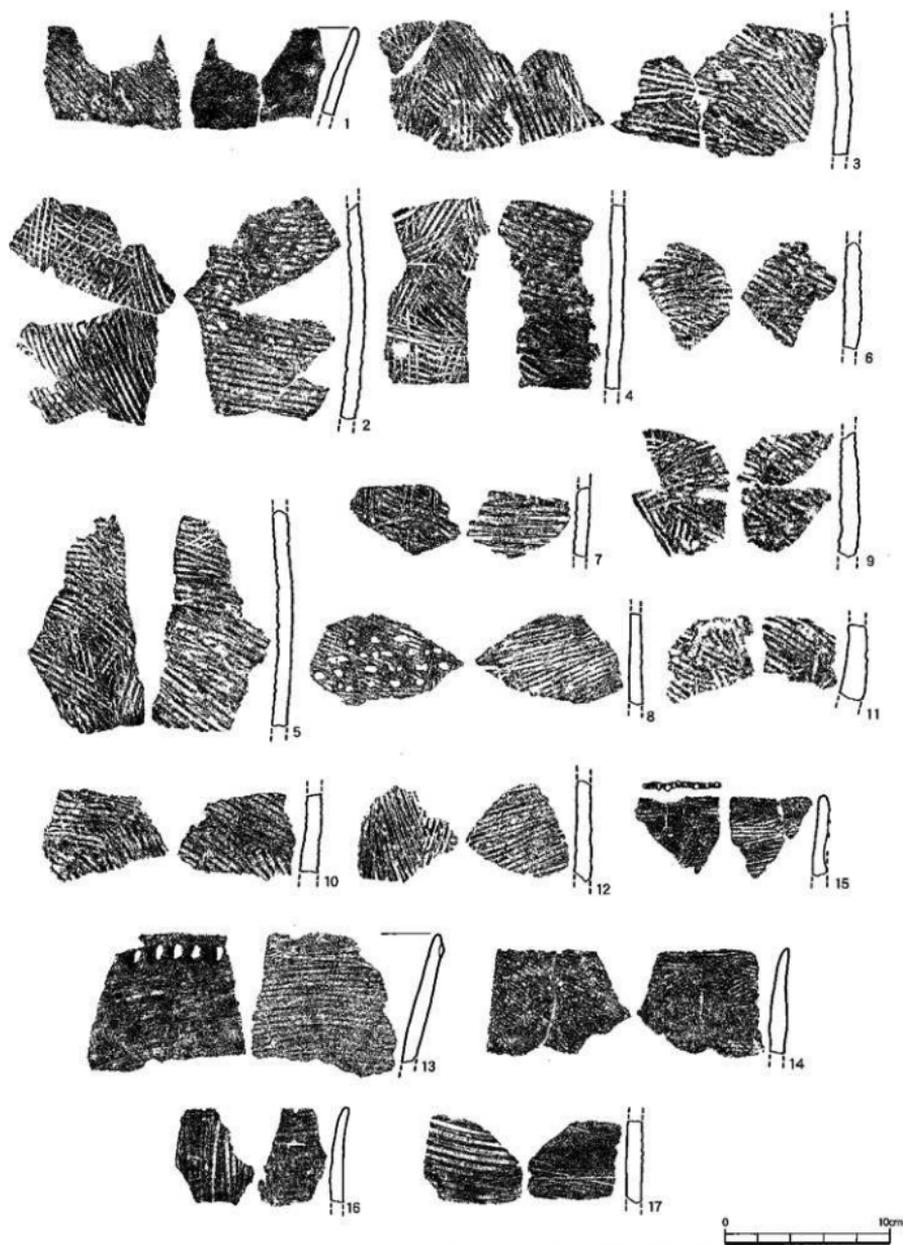
53～57は内外面に細い棒状工具による幾何学的な沈線文を施した口縁部片で、口唇部にはキザミ（53～55）や沈線文（56・57）を施し、いずれもやや外反している。58～61は内外面に刺突文（58は沈線文も）を施した口縁部片であるが53～57のような外反は見られない。62～64は胎土に滑石を含む口縁部片及び胴部片である。62は外面に刺突文及び沈線文を施していて、平らに仕上げた口唇部にはキザミを施している。65～78は外面に沈線文を施した胴部片である。

その他（79～97）

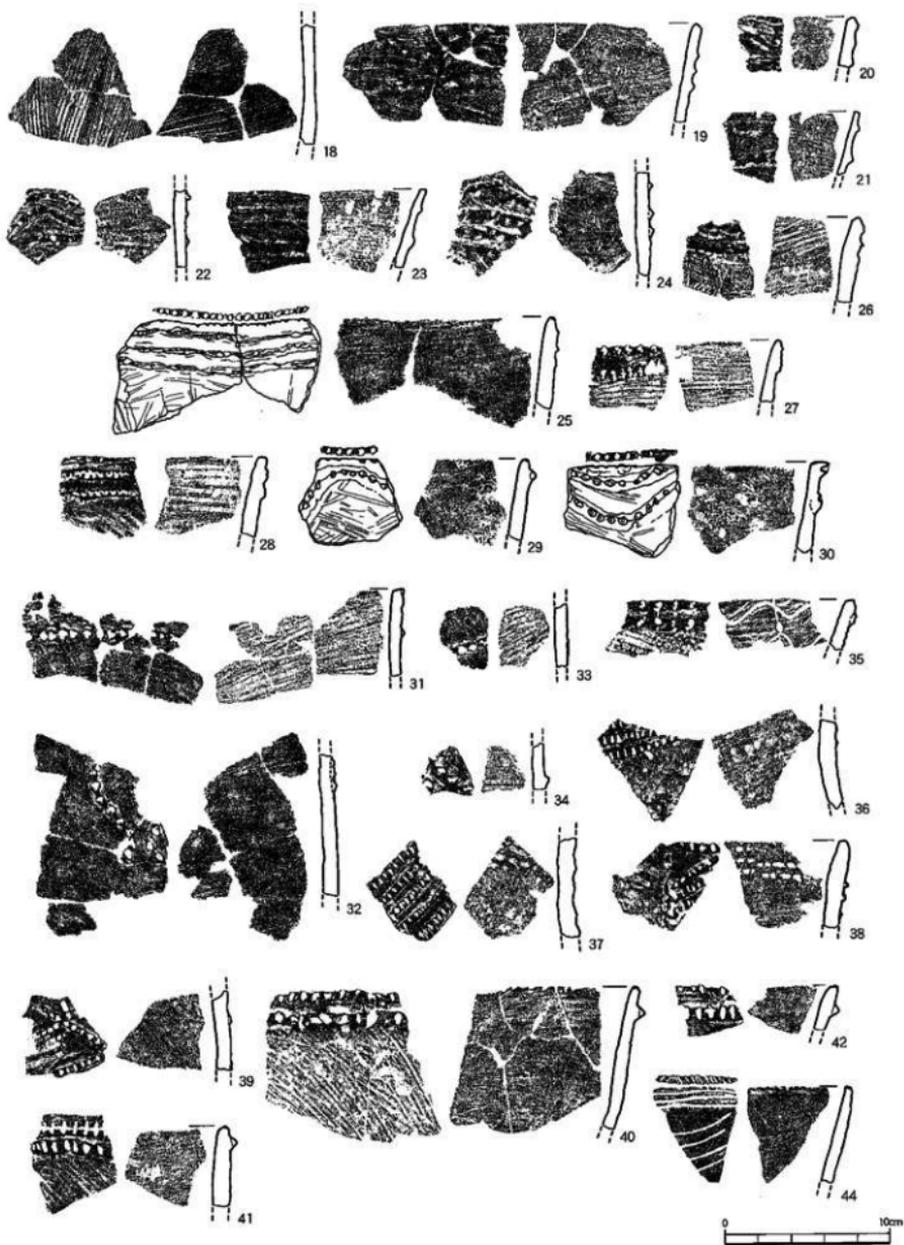
79・80は外面に棒状工具による沈線文を施した口縁部片で、79は波状口縁である。81も胎土及び施文の特徴からみてほぼ同形式の胴部片だと推測されるが、小破片のため器形など詳細は不明である。82・83・85・86は口縁部に肥厚帯を巡らした口縁部片で、84は組織痕が残るやや上げ底の底部である。又、87～93は孔列文土器の口縁部片（～胴部片）であるが、いずれも未貫通の孔が口縁部と平行に穿たれている。94～97は内外面にミガキが施された胴部片で、胴部がくの字状に屈曲している。



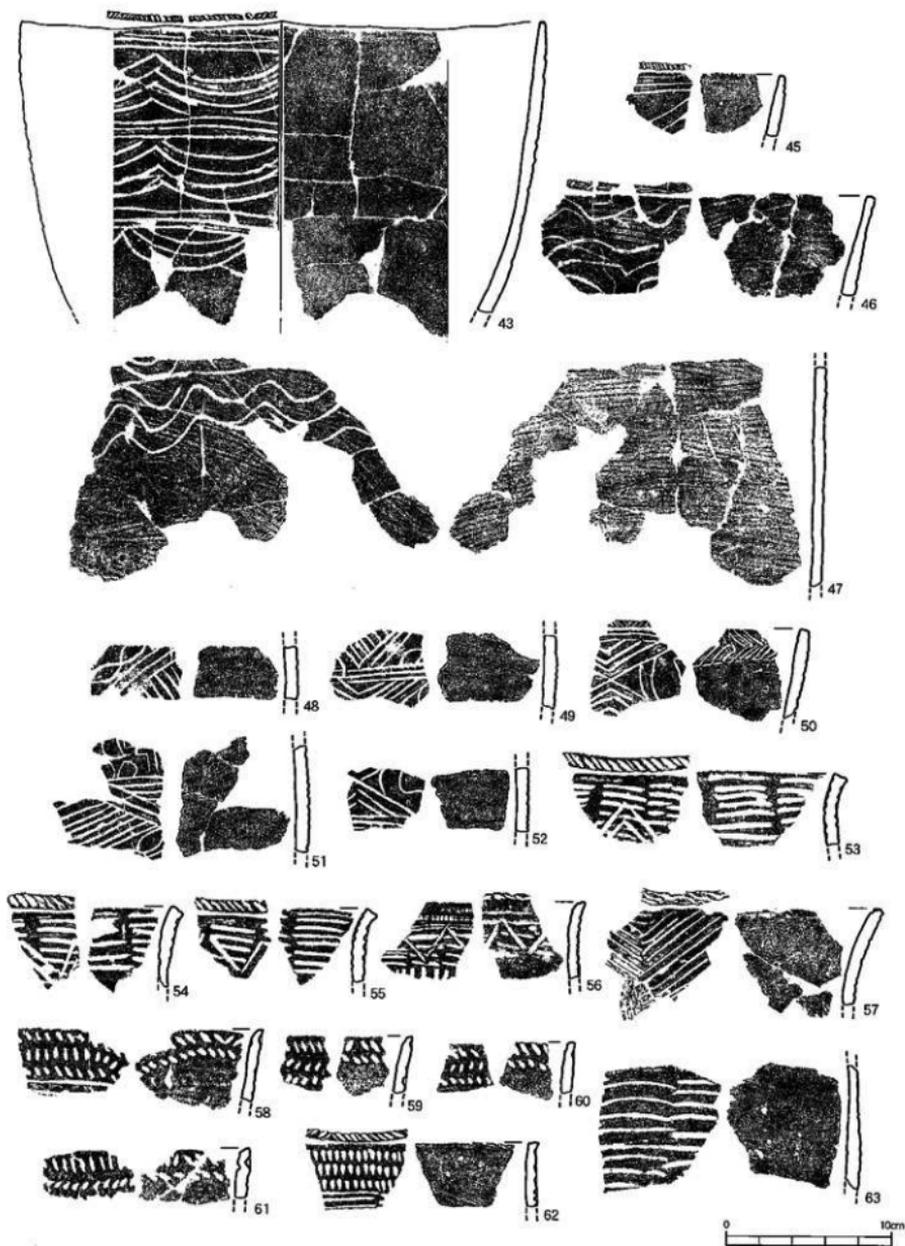
第 81 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土縄文土器分布図 (S=1/750)



第 82 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土縄文土器実測図①(S=1/3)



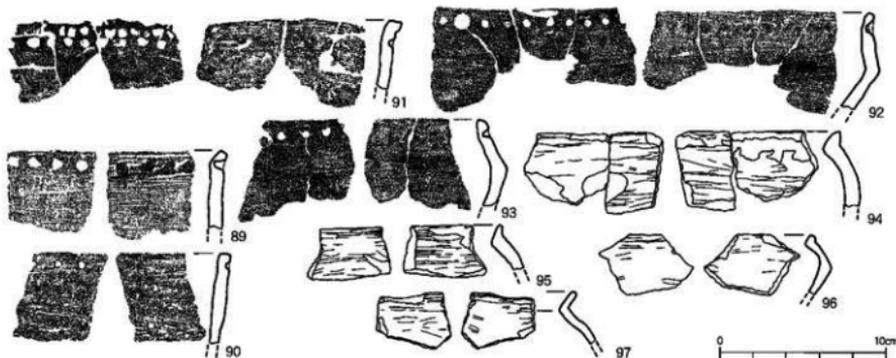
第 83 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土縄文土器夾測②(S=1/3)



第 84 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土縄文土器実測図③(S-1/3)



第85図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土縄文土器実測図④(S=1/3)



第 86 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土縄文土器実測図⑤(S=1/3)

第 11 表 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器観察表

No.	遺構番号	種類	残存部位	文様及び調整		色 別		胎 土				備 考		
				外面	内面	外面	内面	石英	長石	クワン石	クロクワン石		角閃石	砂粒
1	II	鉢	口縁部	具線条文	具線条文×ナナ	509A/2 (灰黄緑)	509A/2 (灰黄緑)	○	○			○	0.8mm以下	
2	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文	759M/2 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○		○		0.8mm以下	
3	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文	598A/3 (C-211)黄緑	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
4	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文	759M/2 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
5	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文	759M/2 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
6	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文	759M/2 (黄緑)	598A/3 (C-211)黄緑	○	○				0.8mm以下	
7	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文	759M/2 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
8	II	鉢	具線条文(ナゲ)	具線条文	具線条文	759M/2 (C-211)黄緑	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
9	II	鉢	具線条文	具線条文	具線条文	598A/4 (C-211)黄緑	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
10	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文	759M/2 (C-211)黄緑	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
11	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文	759M/2 (C-211)黄緑	598A/3 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
12	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文	598A/2 (黄緑)	759M/4 (C-211)黄緑	○	○				0.8mm以下	
13	II	鉢	口縁部	具線条文×ナナ 斜行交番	具線条文	598A/1 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
14	II	鉢	口縁部	具線条文	具線条文×ナナ	759M/2 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
15	II	鉢	口縁部	具線条文	具線条文	759M/2 (C-211)黄緑	759M/4 (C-211)黄緑	○	○				0.8mm以下	口縁部にナギを施している 外周部磨面しい
16	II	鉢	口縁部	具線条文(ナゲ)	具線条文×ナナ	598A/4 (C-211)黄緑	759M/2 (黄緑)	○	○	○			0.15mm以下	
17	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文×ナナ	759M/4 (C-211)黄緑	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
18	II	鉢	胴部	具線条文	具線条文×ナナ	759M/2 (C-211)黄緑	598A/3 (黄緑)	○	○				0.15mm以下	
19	II	鉢	口縁-胴部 斜行交番	具線条文×ナナ 斜行交番	ナナ	598A/2 (黄緑)	598A/3 (C-211)黄緑	○	○	○			0.8mm以下	
20	II	鉢	口縁部	斜行交番	ナナ	759M/1 (黄緑)	598A/2 (黄緑)	○	○	○			0.8mm以下	
21	II	鉢	口縁部	斜行交番	ナナ	598A/2 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
22	II	鉢	胴部	斜行交番	ナナ	598A/2 (黄緑)	598A/3 (C-211)黄緑	○	○	○			0.8mm以下	
23	II	鉢	口縁-胴部	具線条文×ナナ 斜行交番	ナナ	759M/2 (C-211)黄緑	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
24	-	鉢	胴部	斜行交番	具線条文	759M/2 (黄緑)	598A/3 (黄緑)	○	○				0.6mm以下	スス付
25	II	鉢	口縁-胴部	具線条文×ナナ 斜行交番(斜行交)	具線条文×ナナ	598A/3 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○	○			0.8mm以下	スス付 口縁部にナギを施している
26	II	鉢	口縁-胴部	具線条文×ナナ 斜行交番(斜行交)	具線条文×ナナ	759M/2 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○	○			0.8mm以下	スス付
27	II	鉢	口縁-胴部	具線条文×ナナ 斜行交番(斜行交)	具線条文	598A/1 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	口縁部にナギを施している
28	II	鉢	口縁-胴部	具線条文×ナナ 斜行交番(斜行交)	具線条文	759M/2 (C-211)黄緑	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	スス付
29	II	鉢	口縁-胴部	具線条文×ナナ 斜行交番	ナナ	598A/2 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	口縁部にナギを施している
30	II	鉢	口縁-胴部	具線条文×ナナ 斜行交番(斜行交)	ナナ	759M/1 (黄緑)	598A/1 (黄緑)	○	○	○			0.8mm以下	口縁部にナギを施している
31	-	鉢	口縁-胴部	具線条文×ナナ 斜行交番	具線条文	598A/2 (黄緑)	598A/2 (黄緑)	○	○	○			0.8mm以下	口縁部にナギを施している
32	-	鉢	胴部	具線条文×ナナ 斜行交番(斜行交)	具線条文×ナナ	598A/2 (黄緑)	598A/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
33	II	鉢	胴部	具線条文×ナナ 斜行交番(斜行交)	具線条文×ナナ	598A/3 (C-211)黄緑	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
34	-	鉢	胴部	具線条文(ナゲ) 斜行交番(斜行交)	具線条文×ナナ	759M/2 (黄緑)	598A/3 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	
35	II	鉢	口縁-胴部	具線条文×ナナ 斜行交番(斜行交)	具線条文	759M/2 (黄緑)	759M/3 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	口縁部にナギを施している
36	II	鉢	胴部	具線条文×ナナ 斜行交番(斜行交)	ナナ	759M/2 (C-211)黄緑	759M/2 (C-211)黄緑	○	○				0.8mm以下	
37	II	鉢	胴部	具線条文×ナナ 斜行交番(斜行交)	具線条文(ナ)	598A/2 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○	○			0.8mm以下	
38	II	鉢	口縁-胴部	具線条文(ナ) 斜行交番(斜行交)	斜行交	759M/2 (C-211)黄緑	759M/2 (C-211)黄緑	○	○				0.8mm以下	口縁部が一部はがれている
39	II	鉢	胴部	具線条文(斜行交)	ナナ	759M/2 (黄緑)	759M/2 (黄緑)	○	○				0.8mm以下	スス付

No.	遺構番号	器種	残存部位	文様及び調整		色 調		胎 土					備 考	
				外面	内面	外面	内面	石灰	黒石	キンクワ	クロクモ	角閃石		砂粒
40	40	鉢	口縁-胴部	具銘染織文(ナツメ)	具銘染織文×ナツメ	10YR5/3 (こぶい焼)	2.5Y5/2 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.1mm以下	口縁部にナツメを施している
41	41	鉢	口縁-胴部	具銘染織文 織文(ナツメ)	ナツ	10YR5/3 (こぶい焼)	10YR5/3 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	口縁部にナツメを施している
42	42	鉢	口縁部	具銘染織文 織文(ナツメ)	ナツ	10YR5/3 (こぶい焼)	10YR5/3 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	口縁部にナツメを施している
43	43	鉢	口縁-胴部	沈文	ナツ	10YR5/2 (こぶい焼)	2.5Y5/2 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付 口縁部にナツメを施している
44	44	鉢	口縁-胴部	沈文	ナツ	10YR5/2 (こぶい焼)	2.5Y5/2 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付 口縁部にナツメを施している
45	45	鉢	口縁部	沈文	ナツ	10YR4/1 (黒灰)	2.5Y5/2 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付 口縁部にナツメを施している
46	46	鉢	口縁部	具銘染織文×ナツ 沈文	具銘染織文×ナツ	10YR4/1 (黒灰)	5YR4/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	口縁部に沈文を施している
47	47	鉢	胴部	具銘染織文×ナツ 沈文	具銘染織文	7.5Y7/1 (緑灰)	10YR4/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.4mm以下	口縁部に沈文を施している
48	48	鉢	胴部	沈文	ナツ	8YR5/4 (こぶい焼)	2.5Y5/3 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.3mm以下	
49	49	鉢	胴部	沈文	ナツ	7.5Y5/2 (こぶい焼)	2.5Y5/2 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	
50	50	鉢	口縁-胴部	沈文	沈文	7.5Y5/2 (こぶい焼)	10YR4/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.3mm以下	口縁部にナツメを施している
51	51	鉢	胴部	沈文	ナツ	5YR4/3 (こぶい焼)	2.5Y5/2 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.4mm以下	
52	52	鉢	胴部	沈文	ナツ	2.5YR4/2 (黒)	2.5YR4/1 (黒)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	
53	53	鉢	口縁-胴部	沈文	沈文	2.5YR4/1 (黒)	7.5Y5/2 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	口縁部にナツメを施している
54	54	鉢	口縁-胴部	沈文	沈文	5YR4/3 (こぶい焼)	5YR4/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.3mm以下	口縁部にナツメを施している
55	55	鉢	口縁-胴部	沈文	沈文	2.5YR4/2 (黒)	2.5YR4/3 (黒)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	口縁部にナツメを施している
56	56	鉢	口縁-胴部	沈文	沈文	2.5YR4/4 (こぶい焼)	7.5Y5/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.1mm以下	口縁部に沈文を施している
57	57	鉢	口縁-胴部	沈文	ナツ	5YR4/3 (こぶい焼)	2.5YR4/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.1mm以下	口縁部に沈文を施している
58	58	鉢	口縁-胴部	沈文	沈文	2.5YR4/2 (黒)	2.5YR4/2 (黒)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
59	59	鉢	口縁部	沈文	ナツ	10YR4/2 (こぶい焼)	10YR4/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
60	60	鉢	口縁部	沈文	ナツ	7.5YR4/3 (こぶい焼)	2.5YR4/2 (黒)	○	○	○	○	○	0.4mm以下	スス付
61	61	鉢	口縁部	沈文	ナツ	2.5YR4/2 (黒)	2.5YR4/2 (黒)	○	○	○	○	○	0.3mm以下	スス付
62	62	鉢	口縁-胴部	沈文	ナツ	7.5YR4/3 (こぶい焼)	7.5YR4/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.3mm以下	スス付 黒石 口縁部にナツメを施している
63	63	鉢	胴部	沈文	ナツ	5YR5/2 (こぶい焼)	10YR5/2 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	黒石
64	64	鉢	胴部	沈文	赤文	5YR5/2 (こぶい焼)	10YR4/1 (黒)	○	○	○	○	○	0.3mm以下	黒石
65	65	鉢	胴部	沈文	ナツ	2.5YR4/2 (黒)	5YR5/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	
66	66	鉢	胴部	沈文	ナツ	2.5YR4/2 (黒)	2.5YR4/3 (黒)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
67	67	鉢	胴部	沈文	ナツ	2.5YR4/2 (黒)	2.5YR4/3 (黒)	○	○	○	○	○	0.3mm以下	
68	68	鉢	胴部	沈文	ナツ	2.5YR4/2 (こぶい焼)	2.5YR4/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
69	69	鉢	胴部	沈文	ナツ	10YR4/2 (こぶい焼)	5YR5/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.4mm以下	
70	70	鉢	胴部	沈文	ナツ	5YR4/3 (こぶい焼)	2.5YR4/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
71	71	鉢	胴部	沈文	ナツ	2.5Y4/1 (黒)	2.5YR4/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
72	72	鉢	胴部	沈文	具銘染織文×ナツ	5YR4/2 (こぶい焼)	5YR5/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
73	73	鉢	胴部	沈文	ハタギ	2.5YR4/3 (黒)	10YR5/3 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.4mm以下	スス付
74	74	鉢	胴部	沈文	ナツ	2.5YR4/4 (こぶい焼)	2.5YR4/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.4mm以下	
75	75	鉢	胴部	沈文	ナツ	10YR5/2 (こぶい焼)	10YR5/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	黒
76	76	鉢	胴部	沈文	ナツ	10YR5/3 (こぶい焼)	10YR5/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.1mm以下	スス付 赤
77	77	鉢	胴部	沈文	ナツ	5YR5/4 (こぶい焼)	2.5Y7/1 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.3mm以下	
78	78	鉢	胴部	沈文	ナツ	5YR5/4 (こぶい焼)	5YR5/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	
79	79	鉢	口縁-胴部	沈文	ナツ	5YR5/4 (こぶい焼)	2.5YR4/2 (黒)	○	○	○	○	○	0.3mm以下	口縁部にナツメを施している
80	80	鉢	口縁部	沈文	ナツ	5YR5/4 (こぶい焼)	5YR5/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.4mm以下	
81	81	鉢	胴部	沈文 刺繍文(緑区工具)	ナツ	2.5YR5/4 (こぶい焼)	10YR5/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.1mm以下	
82	82	鉢	口縁-胴部	具銘染織文×ナツ 沈文	ハタギ	10YR5/2 (こぶい焼)	10YR5/2 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.1mm以下	
83	83	鉢	口縁-胴部	具銘染織文×ナツ 沈文	具銘染織文×ナツ	10YR5/4 (こぶい焼)	10YR5/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.1mm以下	スス付 口縁部に具銘染織文を施している
84	84	鉢	胴部	刺繍	ナツ	10YR5/4 (こぶい焼)	10YR5/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	
85	85	鉢	口縁-胴部	具銘染織文(ワツナ)	具銘染織文(ワツナ)	10YR5/3 (こぶい焼)	10YR5/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	
86	86	鉢	口縁-胴部	具銘染織文 具銘染織文	具銘染織文×ナツ	10YR5/3 (こぶい焼)	10YR5/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.3mm以下	スス付
87	87	鉢	口縁部	具銘染織文×ナツ 沈文	具銘染織文×ナツ	10YR5/3 (こぶい焼)	10YR5/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
88	88	鉢	口縁-胴部	ナツ 礼列文	具銘染織文×ナツ	10YR5/3 (こぶい焼)	2.5Y7/1 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	
89	89	鉢	口縁-胴部	具銘染織文×ナツ 沈文	具銘染織文×ナツ	2.5Y7/1 (緑灰)	10YR5/2 (緑灰)	○	○	○	○	○	0.4mm以下	
90	90	鉢	口縁-胴部	ナツ 礼列文	ナツ	2.5YR4/1 (黒)	2.5YR4/2 (黒)	○	○	○	○	○	0.4mm以下	
91	91	鉢	口縁-胴部	ナツ 礼列文	具銘染織文×ナツ	10YR5/3 (こぶい焼)	2.5YR4/4 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
92	92	鉢	口縁-胴部	具銘染織文×ナツ 沈文	具銘染織文×ナツ	2.5YR5/3 (こぶい焼)	2.5YR5/2 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
93	93	鉢	口縁-胴部	具銘染織文×ナツ 沈文	具銘染織文×ナツ	2.5YR5/3 (こぶい焼)	2.5YR5/2 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	スス付
94	94	鉢	胴部	ハタギ	ハタギ	10YR4/1 (黒)	10YR4/1 (黒)	○	○	○	○	○	0.1mm以下	口縁部にナツメを施している
95	95	鉢	胴部	ハタギ	ハタギ	2.5Y5/2 (こぶい焼)	10YR5/1 (緑)	○	○	○	○	○	0.1mm以下	口縁部にハタギを施している
96	96	鉢	胴部	ハタギ	ハタギ	2.5YR4/4 (こぶい焼)	2.5Y4/2 (黒)	○	○	○	○	○	0.1mm以下	口縁部にハタギを施している
97	97	鉢	胴部	ハタギ	ハタギ	10YR5/2 (こぶい焼)	10YR5/3 (こぶい焼)	○	○	○	○	○	0.2mm以下	

2. 弥生時代以降の土器

(1) 弥生時代～古墳時代の土器について

壺形土器

98～127 は刻目突帯文を有する甕の口縁部片である。突帯の位置や本数、形成方法によりⅠ類～Ⅵ類に分類した。Ⅰ類は、口縁部が直立し、口縁部より1cm程度下の位置に1条の刻目突帯を貼り付けたものである(98)。Ⅱ類は、口縁部に刻目を施し、その下に1条の刻目突帯を貼り付けたものである(99～101)。口縁部形態は直立もしくは、内湾である。Ⅲ類は、口縁部を引き出すようにナデ調整をすることで形成された疑似突帯状部に刻目を施し、さらにその下に1条の刻目突帯を貼り付けたものである(102～107)。口縁部形態は直立もしくはわずかに内湾するものが多い。このタイプには胴部にも刻目突帯を貼り付けるものがある(104)。Ⅳ類は口縁部とその下に2条の刻目突帯を貼り付けるものである(108～119)。多くが2条の突帯を別々に貼り付けているが、少数ながら1本の太目の粘土紐を貼り付け、その中央部をナデつけることで、2条の突帯を形成しているものも見受けられた(108・109)。口縁部形態は直立するものが多い。Ⅴ類は口縁部もしくはごくわずかに下方に1条の刻目突帯を施すものである(120～126)。口縁部形態は直立もしくはわずかに内湾する。また胴部まで残存しているものの中には、胴部に刻目突帯をもつものもみられた(121・122)。Ⅵ類はⅤ類に類似するが、口縁部に突帯を貼り付けるのではなく、ナデ調整による疑似突帯を形成しているものである(127)。またⅢ類と異なり、疑似突帯の下に刻目突帯をもたないタイプのものである。これらの土器は、弥生時代前期末～中期初頭頃に位置付けられる。

128～132 は刻目突帯文をもつ胴部片である。128・129 は頸部が屈曲し、くの字に外反する口縁部をもつと想定されることから、いわゆる「中溝式」と思われる。131・132 は胴部に2条の刻目突帯をもつものである。

133～141 はくの字に屈曲する甕の口縁部片である。133～135 は屈曲が強く内面の稜線も明瞭に残るもので、弥生時代後期頃に位置付けられる。136～141 は口縁部がやや立ち上がり、長大化したもので、弥生時代終末期～古墳時代前期頃に位置付けられる。

142～156 は甕の底部片である。142・143 は脚台状を呈し、平底である。144～147 は平底である。148～154 は中空の脚台をもつものである。155 は脚台状を呈しており、ほぼ平底であるが中央部をわずかにくぼませたものである。156 は低い輪台をもつものである

157～159 は小型甕である。157 は口縁部がくの字に屈曲する。底部は脚台状を呈する。

壺形土器

160～166 は口縁部片である。緩やかに外湾するもの(160～163)と端部が短く外湾するもの(164～166)がある。167・168 は頸部～胴部片である。169・170 は直頸壺の口縁部片と思われる。外面にミガキが施される。171 は小型壺の口縁部片と思われる。口縁部が突帯状を呈しており、端部から約3cm下に2条の沈線がみられる。

172～174 は文様をもつ胴部片である。172 は3～4cm間隔で、横方向に1条の沈線を施した後に、6～10条の沈線を縦方向や斜め方向に施したものである。沈線は鋳状工具によるものと思われる。173 は1条の刻目突帯をめぐらし、その下に鋳状工具による斜格子文をもつものである。174 は幅広い突帯状を呈する部分に櫛状工具による波状文を施したものである。

175～186 は底部片である。形態や調整方法から壺と分類したが、小破片のため断定はできなかった。底部形態は175～183が平底、184が脚台状平底、185・186が丸底である。

高環形土器

187 は坏部片である。丸みをもつ受部に、大きく外反する口縁部をもつ。188 は坏受部片である。坏部と脚部の接合方法を観察することができる資料である。接合方法は円盤充填を施したのち、充填部分中央に軸心をおいているものである。189 は脚柱部である。

鉢形土器

190 はほぼ完形品である。口縁部は内湾し、胴部中位に最大径をもつ。口唇部は凹状に窪む。底部は平底である。191・192 は口縁部片である。191 はほぼ直立で端部が舌状を呈する。192 はやや内湾し、端部は平坦である。193 は底部片で底部形態は平底である。

ミニチュア土器

194は裏のミニチュア土器で、ほぼ完形品である。口縁部は内湾し、中空の脚台を有する。

(2) 古代の土師器について

壘形土器

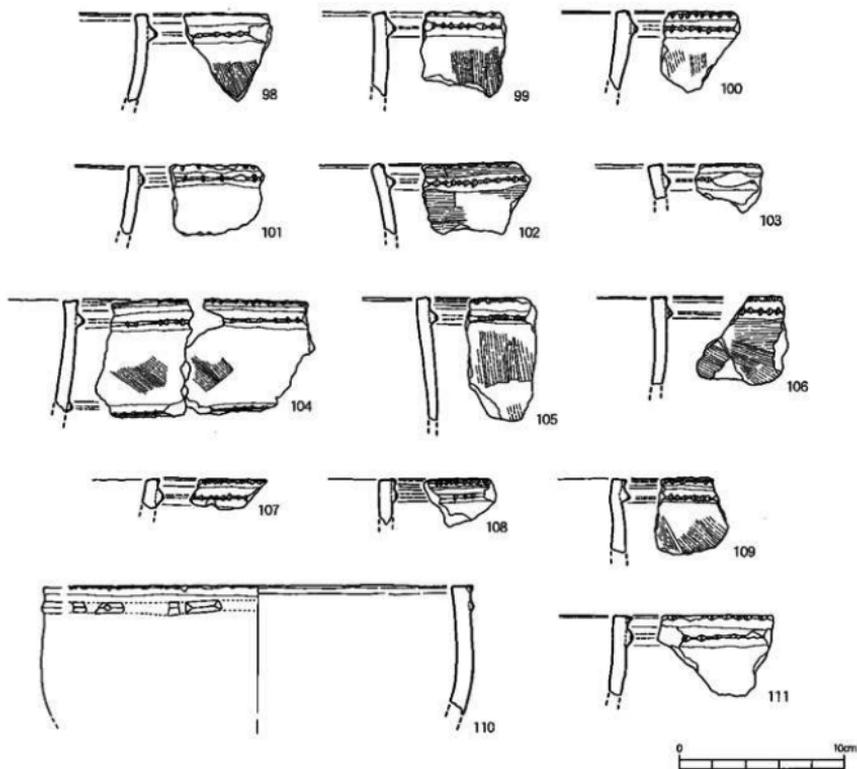
195・196は口縁部～胴部片である。いずれも、口縁部は強く外反する。195の調整は外面が回転ナデ、内面がヘラケズリである。196の調整は外面がナデ、内面がヘラケズリである。

鉢形土器（布痕土器）

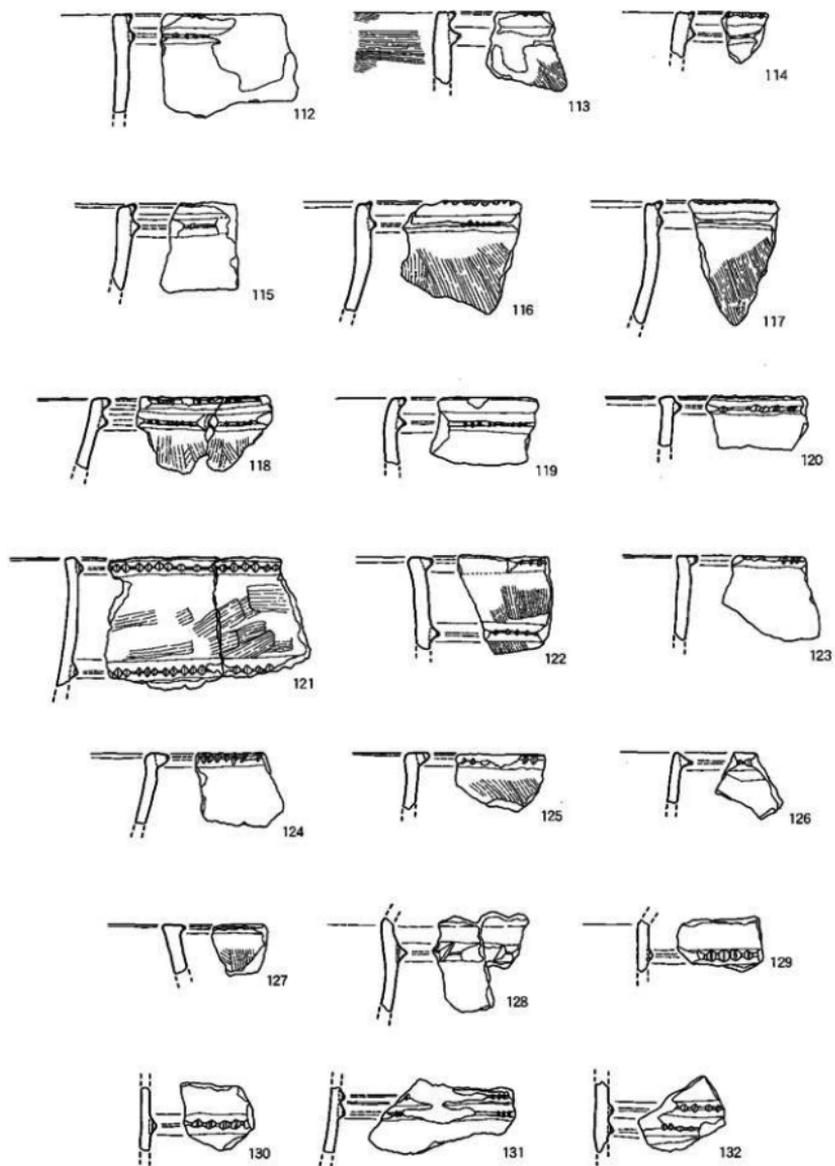
197・198は胴部片である。197・198の調整はともに外面がナデ、内面が布状圧痕である。

壺・杯

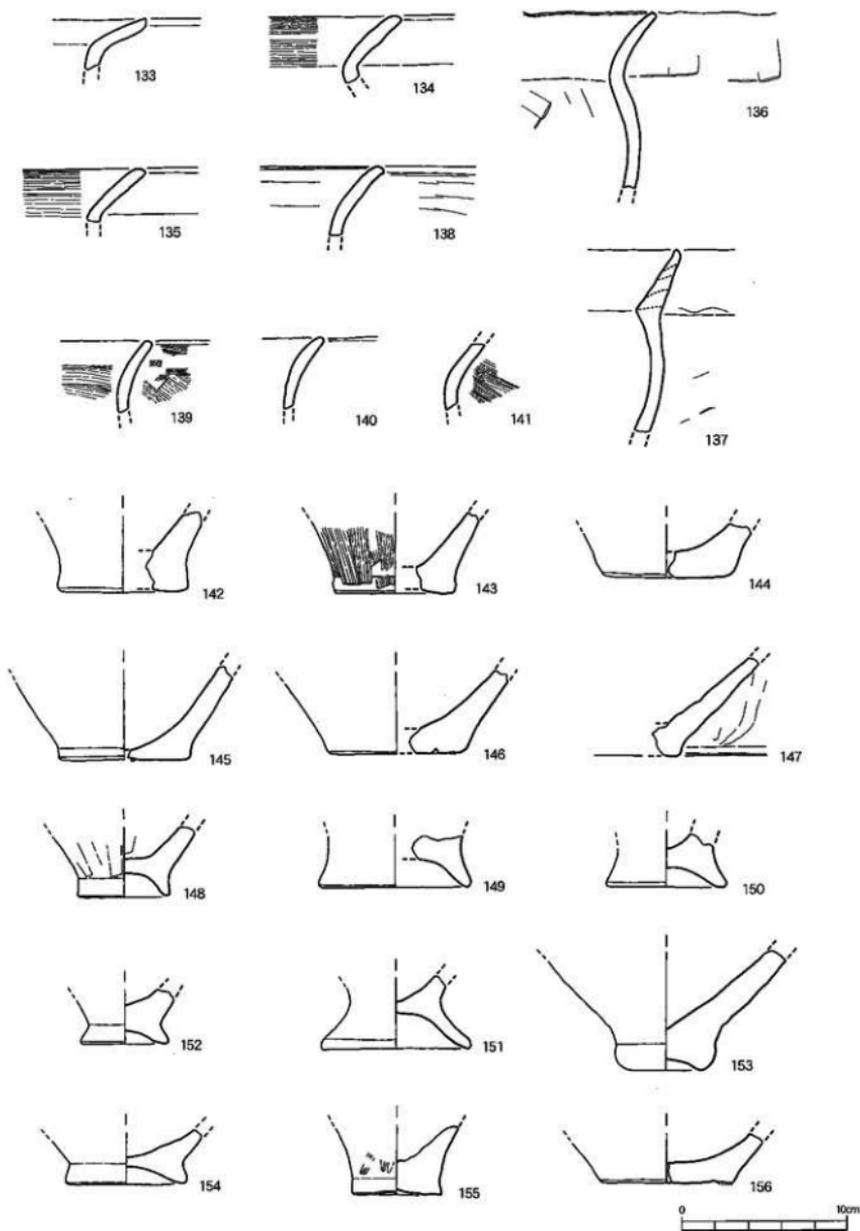
199・200は高台のつく壺である。199は体部が直線的に開き、高台は短く開く。調整は体部外面が回転ナデ、高台部分外面がナデで、内面はナデである。200は199同様、高台が短く開く。調整は体部外面が回転ナデ、高台部分外面がナデで、内面はナデである。201・202は杯である。器高は比較的低い。調整はいずれも外面が回転ナデ、内面がナデで、底部は回転ヘラ切りによる切り離し後ナデられたものと思われる。



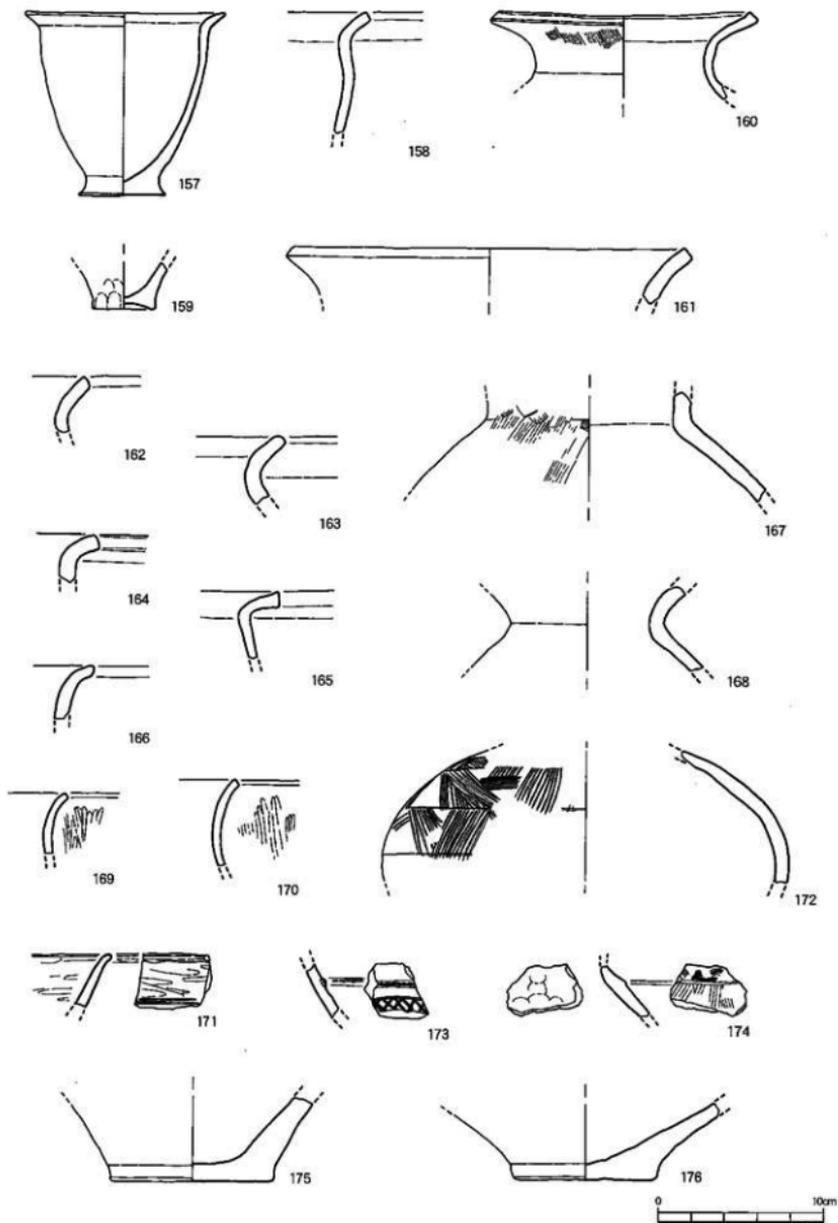
第87図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器《弥生時代以降》実測図①(S=1/3)



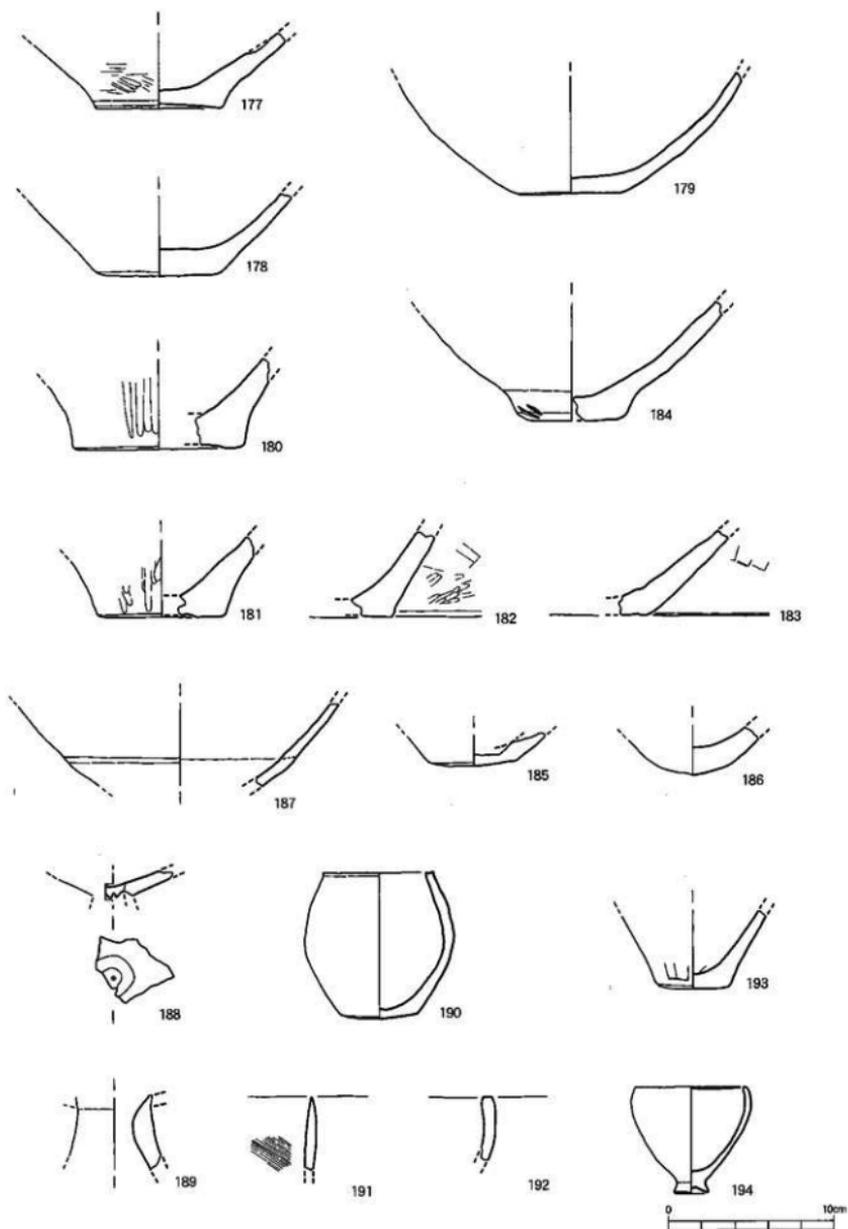
第88図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器《弥生時代以降》実測図②(S=1/3)



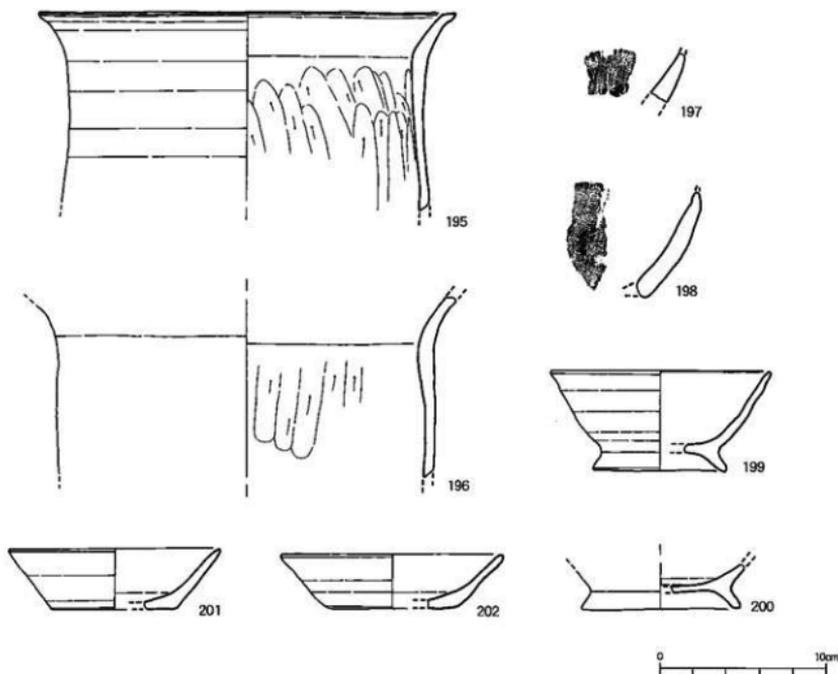
第 89 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器《弥生時代以降》実測図③(S=1/3)



第 90 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器《弥生時代以降》実測図④(S=1/3)



第91図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器《弥生時代以降》実測図⑤(S=1/3)



第 92 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器《弥生時代以降》実測図⑥(S=1/3)

第 12 表 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器《弥生時代以降》観察表

No.	出土層位	種類	残存部位	文様及び図様		色 票		法量 (cm)			備 考	遺物整理No.
				外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高		
98	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆実帯文 横ナデ ハケメ	ナデ	10YR6/3 にふい黄褐色	7.5YR6/4 にふい黄褐色					871
99	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆実帯文 ハケメ	ナデ	7.5YR6/4 にふい黄褐色	7.5YR6/4 にふい黄褐色					864
100	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆 胡豆実帯文 横ナデ ハケメ	ナデ	10YR6/2 灰青褐色	7.5YR6/4 にふい黄褐色					870
101	—	甕	口縁部	胡豆 胡豆実帯文 ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にふい黄褐色	7.5YR6/4 にふい黄褐色					888
102	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆 ナデ 胡豆実帯文 ハケメ	ナデ	10YR6/4 にふい黄褐色	10YR6/4 にふい黄褐色					872
103	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆 胡豆実帯文 ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にふい黄褐色	10YR6/4 にふい黄褐色					877
104	Ⅲ層	甕	口縁一 部部	胡豆実帯文 ハケメ	ナデ	10YR6/3 にふい黄褐色	10YR6/4 にふい黄褐色					1054
105	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆 胡豆実帯文 ハケメ	ナデ	10YR6/3 にふい黄褐色	10YR6/3 にふい黄褐色					866
106	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆 ハケメ	ナデ	10YR7/3 にふい黄褐色	10YR6/4 にふい黄褐色					876
107	—	甕	口縁部	胡豆 ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にふい黄褐色	7.5YR6/4 にふい黄褐色					867
108	—	甕	口縁部	胡豆実帯文 ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にふい黄褐色	7.5YR6/4 にふい黄褐色					868
109	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆実帯文 ナデ ハケメ	ナデ	7.5YR6/4 にふい黄褐色	7.5YR6/4 にふい黄褐色					873
110	Ⅲ層	甕	口縁一 部部	胡豆実帯文 ナデ?	ナデ	10YR6/3 にふい黄褐色	10YR6/4 にふい黄褐色	(234)			口縁部下位の尖帯については磨滅が激しいため、胡豆の有無を確認できなかった	849
111	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆実帯文 ナデ	ナデ	10YR6/3 にふい黄褐色	10YR6/3 にふい黄褐色					873
112	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆実帯文 ナデ	ナデ	10YR6/3 にふい黄褐色	10YR6/3 にふい黄褐色					876
113	Ⅲ層	甕	口縁部	胡豆実帯文 ハケメ	ハケメ	10YR6/3 にふい黄褐色	10YR6/3 にふい黄褐色					869

No.	出土層位	持種	残存部位	文様及び損傷		色 調		法量 (cm)			備 考	遺物整理No.	
				外面	内面	外面	内面	口径	底径	高さ			
114	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ナデ	ナデ	75YR4/2 灰緑	75YR6/4 にぶい黄				スス付着	886	
115	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄緑	10YR6/3 にぶい黄					878	
116	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ハケメ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄					881	
117	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ハケメ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄				口縁部下位の夾書については磨滅が著しいため、刻目の有無を確認できなかった	880	
118	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ナデ ハケメ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄					874	
119	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ナデ	ナデ	75YR4/2 灰緑	10YR6/3 にぶい黄					886	
120	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄					890	
121	Ⅲ層	壺	口縁～胴部	刻目夾書文ハケメ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄				スス付着	1058	
122	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ハケメ	ナデ	25YR4/1 黄灰	75YR6/3 にぶい黄					885	
123	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/3 にぶい黄					888	
124	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄					883	
125	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文ハケメ	ナデナ	75YR6/4 にぶい黄	5YR6/4 にぶい赤				内面の磨滅が著しいため、損傷が不明瞭である	889	
126	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目夾書文 新収工具によるナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/4 にぶい黄					884	
127	Ⅲ層	壺	口縁部	刻目 横ナデ ハケメ	横ナデ ハケメ	75YR6/4 にぶい黄	10YR6/4 にぶい黄					885	
128	Ⅲ層	壺	頸～胴部	刻目夾書文横ナデ	ナデ	10YR4/1 黄灰	75YR6/4 にぶい黄					882	
129	Ⅲ層	壺	頸～胴部	刻目夾書文ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄					891	
130	Ⅲ層	壺	胴部	刻目夾書文ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	5YR6/4 にぶい赤				スス付着	893	
131	Ⅲ層	壺	胴部	刻目夾書文ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	25YR6/6 明赤					894	
132	Ⅲ層	壺	胴部	刻目夾書文ナデ	ナデ	75YR4/2 灰緑	75YR6/3 にぶい黄					892	
133	Ⅲ層	壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	25YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄					912	
134	Ⅲ層	壺	口縁～胴部	ナデ	ハケメ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄					914	
135	Ⅲ層	壺	口縁～胴部	ナデ	ハケメ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄					909	
136	Ⅲ層	壺	口縁～胴部	ナデ 新収工具によるナデ	ナデ 新収工具によるナデ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄				スス付着	435	
137	Ⅲ層	壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	5YR6/4 にぶい赤					915	
138	Ⅲ層	壺	口縁～胴部	新収工具によるナデ	新収工具によるナデ	75YR6/4 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄				スス付着	910	
139	Ⅲ層	壺	口縁～胴部	ハケメ ナデ	ハケメ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄				スス付着	911	
140	Ⅲ層	壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄				スス付着	913	
141	Ⅲ層	壺	底部	ハケメ ナデ	ハケメ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄				スス付着	916	
142	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	25YR4/1 黄灰		(7.8)		反転復元	844	
143	Ⅲ層	壺	底部	ハケメ	ナデ	10YR6/2 灰黄緑	75YR6/3 にぶい黄		(7.0)		反転復元	882	
144	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄		(5.8)		反転復元	851	
145	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄		(7.8)		反転復元	852	
146	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄		(7.9)		反転復元	861	
147	Ⅲ層	壺	底部	ヘラ状工具によるナデ	ナデ	5YR6/4 にぶい赤	5YR4/3 にぶい赤					854	
148	Ⅲ層	壺	底部	新収工具によるナデ	新収工具によるナデ 指オサエ	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/2 灰黄緑		(5.6)		反転復元	880	
149	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	5YR6/4 にぶい赤	5YR6/4 にぶい赤		(9.0)		反転復元	842	
150	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	10YR4/2 灰黄緑		(1.1)		反転復元	853	
151	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	25YR4/2 黄灰		(8.8)		反転復元	841	
152	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	75YR4/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄		(5.4)			846	
153	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄		(4.4)			934	
154	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄		(7.0)		反転復元	849	
155	Ⅲ層	壺	底部	ハケメ ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	75YR6/3 にぶい黄		(5.4)		反転復元	933	
156	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄	10YR6/2 灰黄緑		(7.8)		反転復元	850	
157	Ⅲ層	小壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/3 にぶい黄		(12.0)	(5.2)	11.1	反転復元	1053
158	Ⅲ層	小壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい黄	75YR6/4 にぶい黄					907	

No.	出土 層位	器種	残存 部位	文様及び調整		色 調		法量 (cm)			備 考	遺物 整理No.
				外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高		
159	Ⅲ層	小型 壺?	底部	ナデ 指サエ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	10YR4/3 にぶい黄			(3.7)		831
160	Ⅲ層	壺	口縁～ 腹部	横ナデ ハケメナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	5YR5/6 明赤褐	(14.8)			スズ付着、反転還元	436
161	Ⅲ層	壺	口縁	横ナデ	横ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄	(23.4)			反転還元	901
162	Ⅲ層	壺	口縁～ 腹部	ナデ	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR6/4 にぶい黄					904
163	Ⅲ層	壺	口縁～ 腹部	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄					900
164	Ⅲ層	壺	口縁～ 腹部	ナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄					906
165	Ⅲ層	壺?	口縁～ 腹部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄					908
166	Ⅲ層	壺	口縁～ 腹部	ナデ	ナデ	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐					905
167	Ⅲ層	壺	胴～ 腹部	ハケメ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	2.5Y4/1 黄灰				反転還元	442
168	Ⅲ層	壺	胴～ 腹部	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄				反転還元	899
169	Ⅲ層	小型壺	口縁部	横ナデ	ミガキ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄				440
170	Ⅲ層	小型壺	口縁～ 腹部	横ナデ	ミガキ	横ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄			441
171	Ⅲ層	小型壺	口縁部	横ナデ	ミガキ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄				1057
172	Ⅲ層	壺	胴部	ハケメナデ 捺線文	ナデ	10YR6/4 にぶい黄	5Y4/1 灰				反転還元	1066
173	Ⅲ層	小型壺	胴部	ナデ	指サエ	7.5YR6/4 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄					986
174	Ⅲ層	小型壺	胴～ 腹部	捺線文 ハケメ	指サエ	7.5YR6/4 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄					985
175	Ⅲ層	壺?	底部	丁寧なナデ	丁寧なナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR6/3 にぶい黄	(8.6)			反転還元	918
176	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	2.5Y4/1 黄灰	(8.0)			反転還元	917
177	Ⅲ層	壺	底部	ミガキ	ナデ	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR6/4 にぶい黄	(7.5)		反転還元	919
178	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	10YR4/1 褐灰	(4.2)			反転還元	848
179	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	10YR4/1 褐灰	(6.0)			スズ付着、反転還元	835
180	Ⅲ層	壺?	底部	ハケメナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	2.5Y4/1 黄灰	(10.3)			反転還元	957
181	Ⅲ層	壺?	底部	ミガキナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄	(7.8)			反転還元	856
182	Ⅲ層	壺?	底部	捺線文によるナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄					858
183	Ⅲ層	壺?	胴～ 腹部	捺線文によるナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄	2.5YR5/1 黄灰				黒斑あり	855
184	Ⅲ層	壺	胴～ 腹部	ナデ	ナデ	2.5YR5/2 黄灰	10YR4/1 褐灰	(5.0)			反転還元	843
185	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	ナデ?	10YR6/4 にぶい黄	5Y4/1 灰	(5.2)			内面の割落が激しく、調整が不明瞭。反転還元	847
186	Ⅲ層	壺	底部	ナデ	捺線文によるナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	2.5YR4/1 黄灰				底部に線状? 窪み有り、反転還元	859
187	Ⅲ層	高杯	坪部	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄	10YR6/4 にぶい黄				内面割落が激しく、調整が不明瞭。反転還元	967
188	Ⅲ層	高杯	坪部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄				反転還元	437
189	Ⅲ層	高杯	胴部	ナデ	ナデ?	10YR6/3 にぶい黄	10YR5/3 にぶい黄				反転還元	983
190	Ⅲ層	鉢	口縁～ 腹部	横ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄	(5.8)	(1.6)	8.9	反転還元	438
191	Ⅲ層	鉢	口縁部	ナデ	横ナデ	ハケメ	7.5YR6/4 にぶい黄					900
192	Ⅲ層	鉢	口縁部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄					902
193	Ⅲ層	鉢	底部	捺線文によるナデ	捺線文によるナデ	2.5YR6/2 黄灰	10YR6/3 にぶい黄	(4.8)			反転還元	845
194	Ⅲ層	ミニチノブ土器(壺)	口縁～ 腹部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	10Y4/1 灰色	(8.6)	(2.1)	7.2	反転還元	898
195	Ⅲ層	壺	口縁～ 腹部	横ナデ	横ナデ	7.5YR7/4 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄	(25.0)			反転還元	968
196	Ⅲ層	壺	胴～ 腹部	横ナデ	横ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄				反転還元	982
197	Ⅲ層	一 鉢	胴部	ナデ	布痕	2.5YR6/6 にぶい黄	5YR5/4 にぶい赤褐					925
198	Ⅲ層	一 鉢	胴部	ナデ	布痕	7.5YR6/4 にぶい黄	5YR5/4 にぶい赤褐					926
199	Ⅲ層	壺	口縁～ 腹部	横ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄	(13.0)	(7.8)	6.1	反転還元	921
200	Ⅲ層	壺	底部	横ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄	(8.4)			反転還元	920
201	Ⅲ層	坪	口縁～ 腹部	横ナデ	ナデ	5YR6/6 灰	5YR6/6 明赤褐	(12.5)	(7.2)	(3.7)	反転還元	927
202	Ⅲ層	坪	口縁～ 腹部	横ナデ	ナデ	5YR6/6 明赤褐	2.5YR6/6 明赤褐	(13.2)	(7.7)	(3.3)	反転還元	922

3. 石器

アカホヤ火山灰層上位の遺物包含層中より約 1059 点の石器が出土している。ここでは製品類を中心に報告を行う。なお器種分類については縄文時代早期の遺物包含層から出土した石器と同様の基準で分類をおこなっている。各器種の分類基準については第 3 章の第 3 項を参照していただきたい。またアカホヤ火山灰層上位の遺物包含層からのみ出土した石器の分類基準については後述している。

石鏃 (203 ~ 250)

欠損品も含めて総数で 64 点が出土している。そのうち 48 点を図示している。以下の 6 類に細分が可能である。

- ・A 類 (203 ~ 208) : 基部の挟りないものや浅いものをまとめた。全体の形状は正三角形か二等辺三角形を呈し、縄文早期の石鏃の X 類と同じ特徴を持つ。総数で 6 点出土している。
- ・B 類 (209 ~ 211) : 上半部から外側に屈曲して脚部において最大幅を持ち、全体の形状が将棋の駒のような形を呈するもの。縄文早期の石鏃 III 類と同じ特徴を持つ。総数で 3 点出土している。
- ・C 類 (212) : B 類と同様に上半部において屈曲するが外側にはあまり広がらないもの。いわゆる五角形鏃に分類される資料である。チャート製の 1 点のみ出土している。
- ・D 類 (213 ~ 216) : B 類と同様に上半部から外側に屈曲し、脚部において最大幅を持つものであるが、先端部が挟りこむように作られている。総数で 4 点出土している。
- ・E 類 (217 ~ 219) : 上半部において先端部と基部の境界に段を有しているもの。D 類と同様に先端部の作り方に特徴を持つものである。総数で 3 点が出土している。
- ・F 類 (220 ~ 246) : A ~ E 類・G 類に該当しないものをここにまとめておくが 2 種類の細分案を示しておく。
F1 類 : 脚部において屈曲するもの (220 ~ 229)。このうち一部は刃部が鋸歯状を呈する。
F2 類 : F1 類に該当しないもの (230 ~ 246)。このうち一部は刃部が鋸歯状を呈する。
- ・G 類 (247 ~ 250) : 磨製石鏃。局部磨製もこれに含めておく。堆積岩系の石材の使用が目立つ。先端部から基部にかけて直線的に開くもの (247・249・250) と曲線的に開くもの (248) と 2 種類見られる。後者については弥生時代のもとの断定できるだろう。

石鏃未製品 (251 ~ 261)

総数で 13 点が出土している。素材剥片の形状を大きく残す資料や石鏃なども含まれている可能性は考えられる。251 は粘板岩製で 248 のような磨製石鏃の未製品である。他の資料については打製石鏃の未製品であると考えられる。各産地の黒曜石の使用が目立つ。

石鏃 (262 ~ 267)

総数で 6 点が出土している。チャート・流紋岩の使用が目立つ。縄文早期の石鏃と同じ分類が可能であると考えられ、以下のようになる。

- ・a 類 (262・267) : 両面調整により全体の形状を逆三角形を想定する形に整えるもの。石鏃 b 類よりも鏃部は長い。
- ・b 類 (263 ~ 266) : 剥片の形状を大きく残すもの。

石匙 (268 ~ 279)

総数で 14 点が出土している。姫島産黒曜石・頁岩・チャートの使用が目立つ。以下の 2 種類に分類される。

- ・a 類 (268 ~ 274) : 縦型を呈するもの。素材剥片の形状を大きく残すもの (268 ~ 272) と調整が入念で加工が全面に及ぶもの (273) に細分が可能である。
- ・b 類 (275 ~ 279) : 横型を呈するもの。縦型と同様に素材剥片の形状を大きく残すもの (275 ~ 278) と調整が入念で加工が全面に及ぶもの (279) に細分できる。

上記の分類案のほかにつまみの形状 (体部との境の状況・つまみの形態など) からも細分類は可能である。

スクレイパー (280 ~ 290)

総数で 23 点出土している。全体的に頁岩の使用が目立つ。また欠損品については石匙の素材形状をよく残す資料の破片が混じっている可能性も考えられる。285 は素材剥片の打面付近に両側縁から調整が施されており、石匙の b 類の可能性はある。素材剥片の長軸方向に刃部調整を施しているものが多い。

剥片類 (291・292)

総数で 844 点が出土している。内訳については以下のとおりである。(チャート 85 点 : 478.4g、流紋岩・頁岩 159 点 : 2325.4g、砂岩 96 点 : 4681.6g、姫島産黒曜石 254 点 : 214.7g、桑ノ木津留産黒曜石 58 点 : 66.6g、西北九州産黒曜石 104 点 : 114.2g、鹿児島県産黒曜石 15 点 : 22.9g、安山岩・サヌカイト 50 点 : 117.6g、玉髄 21 点 : 37.1g、その他 2 点 : 27.8g ※石材鑑定については肉眼観察であるため、分析方法によっては数字が変動する可能性がある。)

全体的に砂岩製のものは大振りなものが多く、頁岩・流紋岩については大振りなものが少数見られるが、中型品・小型品が多い。そのほかの石材についてはほとんどが小型品である。2点を図示している。291は打面付近に両側縁から調整を施し、石匙のつまみのようにしているが刃部調整は行われていない。292は背面右側縁に荒い二次加工を施している。

石核 (293～296)

総数で34点が出土している。内訳については以下のとおりである。(チャート4点:105g、流紋岩・頁岩5点:617.2g、砂岩4点:3621g、姫島産黒曜石5点:41.9g、桑ノ木津留産黒曜石4点:22.2g、西北九州産黒曜石5点:31.8g、鹿儿島県産黒曜石6点:46.2g、安山岩・サヌカイト1点:3.9g ※剥片と同様に石材鑑定については肉眼観察であるため、分析方法によって数字が変動する可能性がある。)

残核の規模については剥片と同じような傾向が確認される。4点を図示している。293・295は剥片素材で一方からのみ剥片剥離をおこなっている。295・296は礫の状態から剥片剥離をおこなっており、作業面の反対の面には自然面が多く残る。またこれらは作業面を転回しながら剥片剥離を試みている。全体的な共通点としては打面調整を行わず剥片剥離をしているということである。

砥石 (297～299・写真図版55の上段)

柱状の礫または板状の剥片・礫片を素材として明瞭な平滑面をもつもの。また平滑面を持たずとも細い溝状の痕跡を持つ礫または礫片もここにまとめた。後者は2点出土しており、本来は有溝砥石と分類されるべきものであると考えられる。両者ともに平面形はほぼ長方形に限定される。石皿とは規模と平面形の違いで分類をしている。また平滑面(砥面)については光沢が見られる箇所もある。砥面についてはほとんどの資料が複数持っている。大型品と小型品で使用方法に違いがあることが想定され、規模で細分されるだろう。全部で7点が出土している。打製石斧(300・302)

剥片または扁平な礫を素材として、剥離作業だけで三角形または四角形の平面形作り出し、その短辺に刃部を作成するもの。刃部にも研磨作業は一切おこなわれない。2点出土している。300は安山岩製で大振りな横長剥片を素材とし、両側縁からの調整により形状を整える。側面の形状からは横斧を想定させるが、規模や刃部が両刃であることから伐採具の可能性も考えられる。302はホルンフェルス製の不整形な剥片を素材としている。刃部は欠損しているが、平面形状・側面の薄さから土堀具であると考えられる。

磨製石斧 (301・303)

大型品と小型品の2点が出土している。両者ともに敲打及び研磨により全体の形状を整えている。301は刃部を欠損するが、その規模からは伐採具と推定される。基部の端部や側面の研磨が顕著である。303は研磨がおこなわれているものの風化が著しくやや不明瞭である。規模からは加工具であると考えられる。

砥石・磨石 (304～309)

総数で38点が出土している。縄文早期のものと同じように砂岩製のものが圧倒的に多いが、縄文早期に使用されなかった凝灰岩製の磨石と頁岩製の砥石が出土している。304は砂岩製の砥石である。側面には敲打による剥離痕が確認される。309は砂岩製の磨石である。使用の痕跡が非常に著しく使用面と側面の境目に線が確認されるほどである。縄文早期の包含層から出土した磨石にはこの資料ほど使用痕が明瞭に残存しているものは見られなかった。

石皿 (写真図版55の下段)

総数で12点出土している。縄文早期の包含層からは出土しなかった凝灰岩製のものが1点見られる。

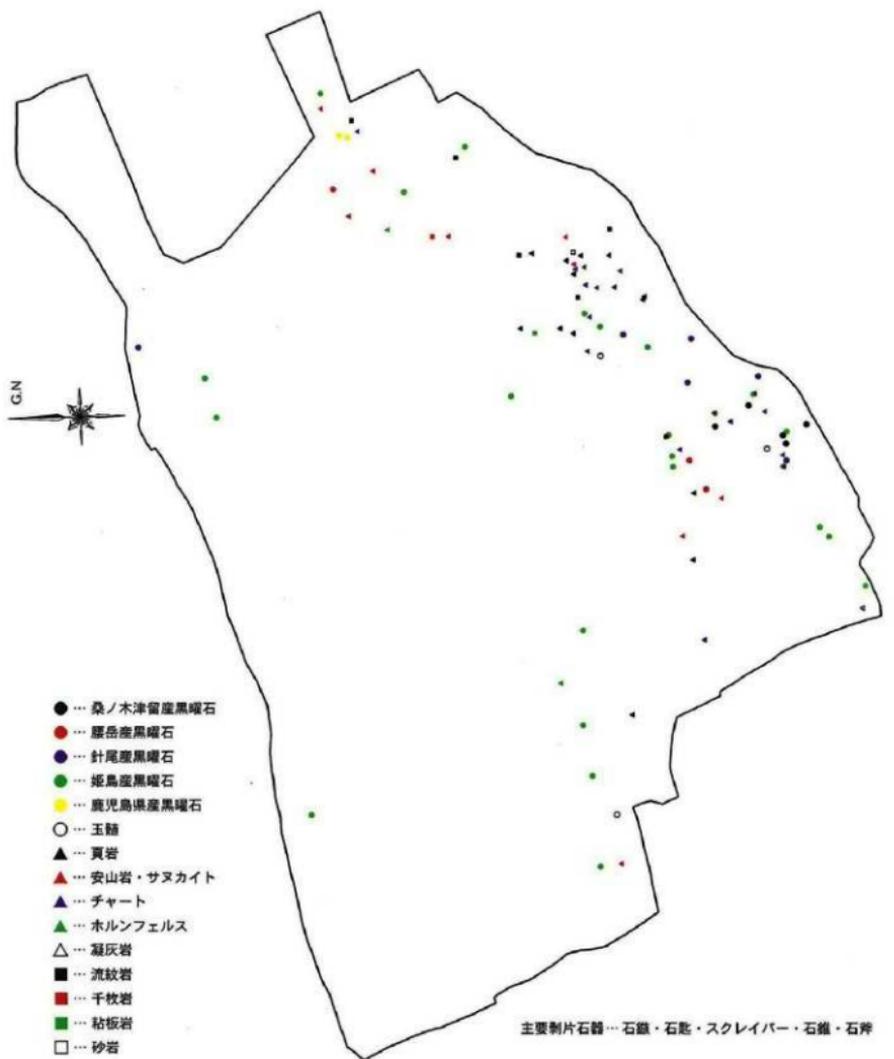
軽石

総数で3点出土している。大型品1点と小型品が2点で、表面にはわずかに擦ったような痕跡が確認される。

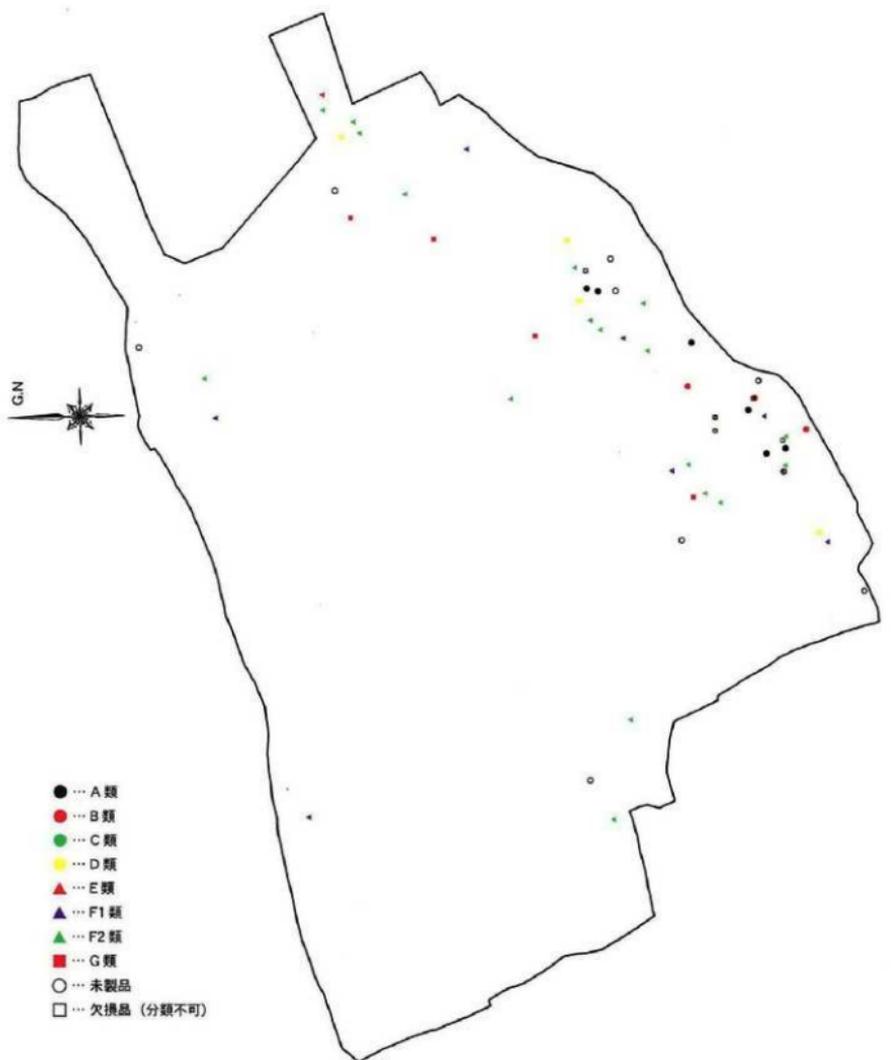
アカホヤ火山灰層上位遺物包含層における石器の出土状況及び平面分布について

アカホヤ火山灰層上位遺物包含層から出土した主要石器についてはそのほとんどが調査区の南側に集中して出土している。調査区の南側においては竊式土器の集中が確認できるものの、複数の型式の土器が混在しており、各石器の時期の特定は困難である。さらにアカホヤ火山灰層上位遺物包含層は縄文前期以降の遺構の形成過程などによる縄文早期の遺物包含層の掘削作用により、アカホヤ火山灰層上位に縄文早期の遺物が混在している可能性があるという問題点も指摘できる。確実に縄文早期には存在しない遺物または各時代に特徴的に見られる資料を積み重ねて検討することにより、このような遺物包含層の出土遺物を時期ごとに分類することができるようになるだろう。

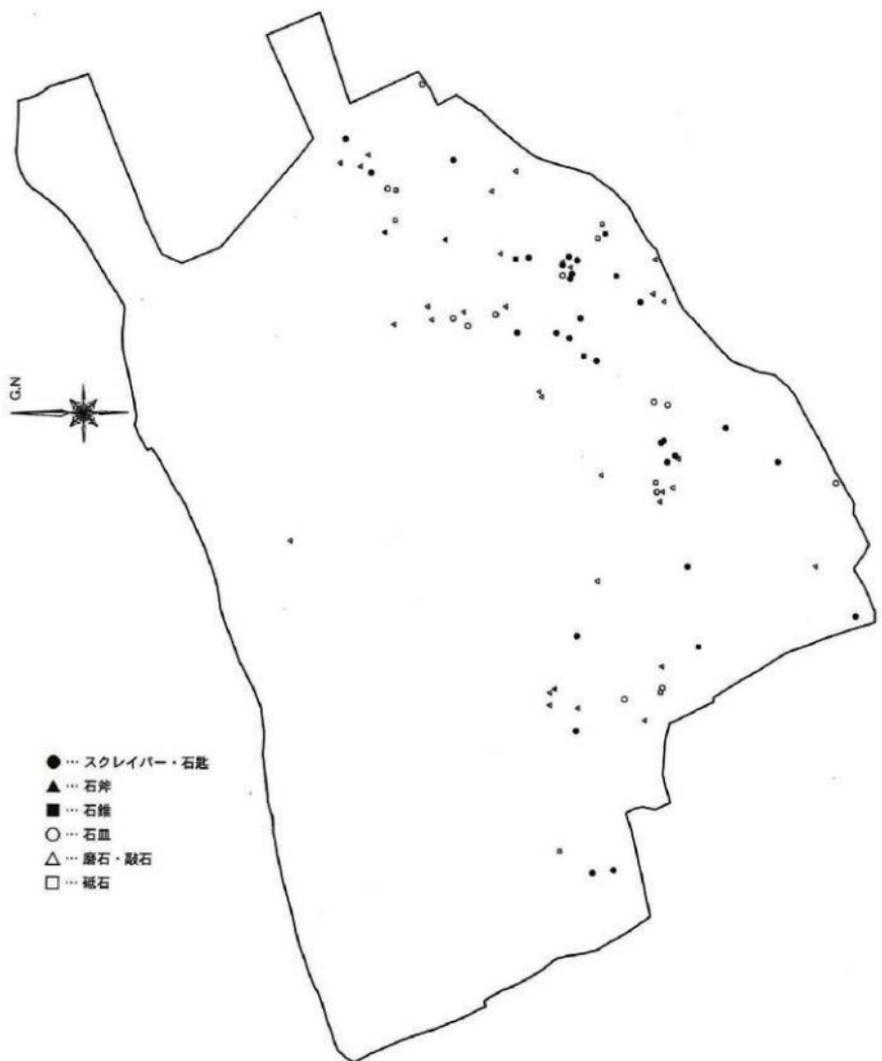
アカホヤ火山灰層上位遺物包含層における石器の特徴的な平面分布状況としてはスクレイパーや石匙が調査区南側の中央部に集中しており、黒曜石類や安山岩などの外来的な石材を使用する石器がそのやや南西側に集中しているという点が見受けられた。しかし、この分布状況がどのような意味を持っているのかということをも十分に検討できなかった。



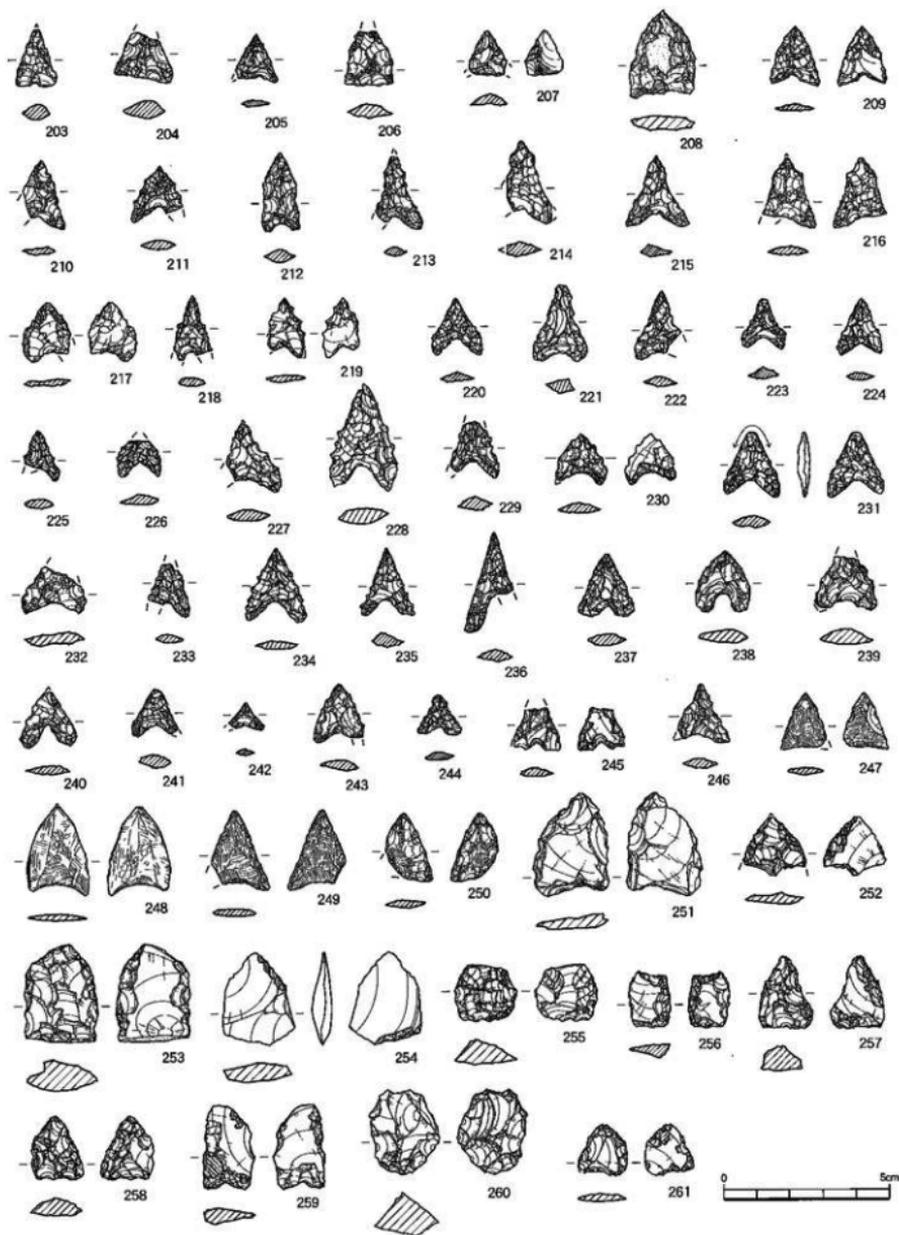
第 93 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土主要剥片石器分布図【石材別】(S=1/750)



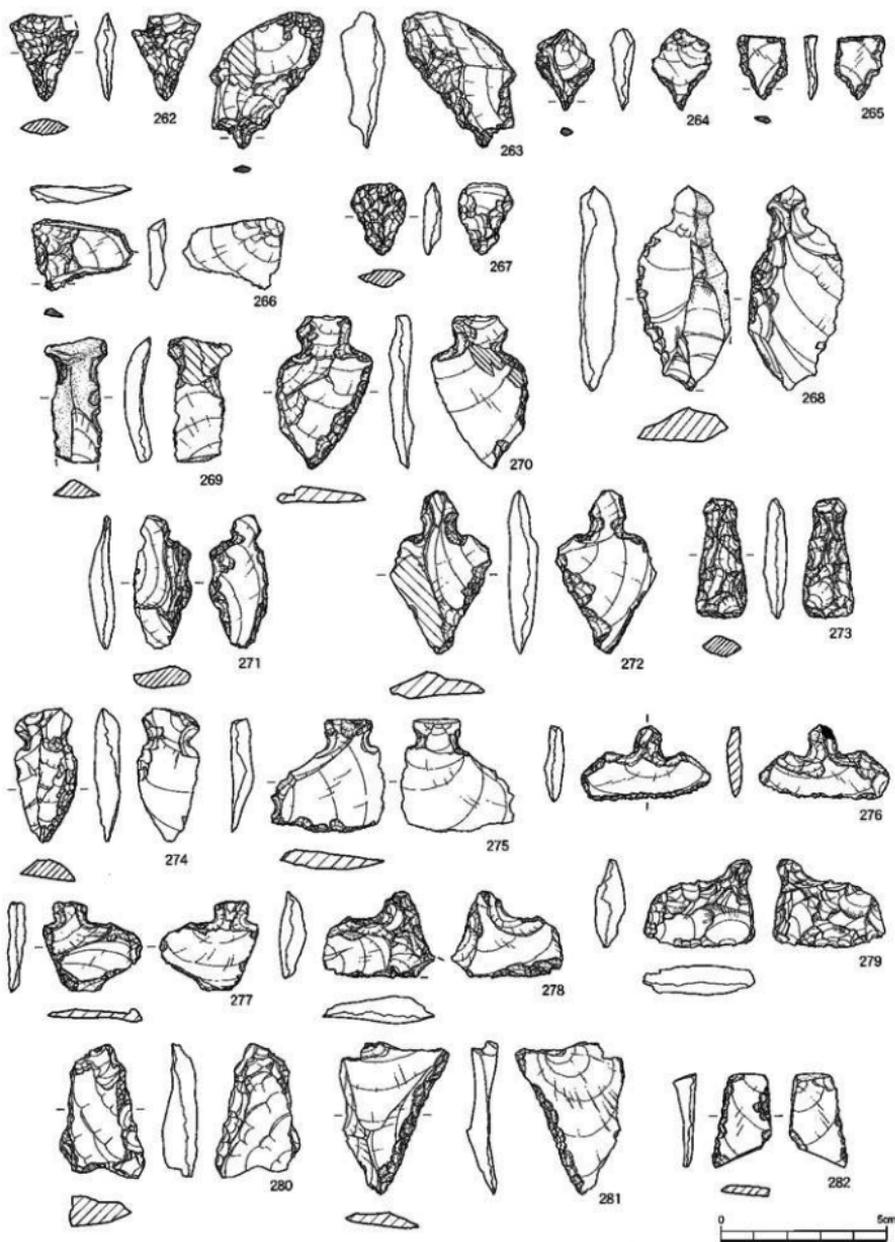
第94図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石鏝分布図 (S=1/750)



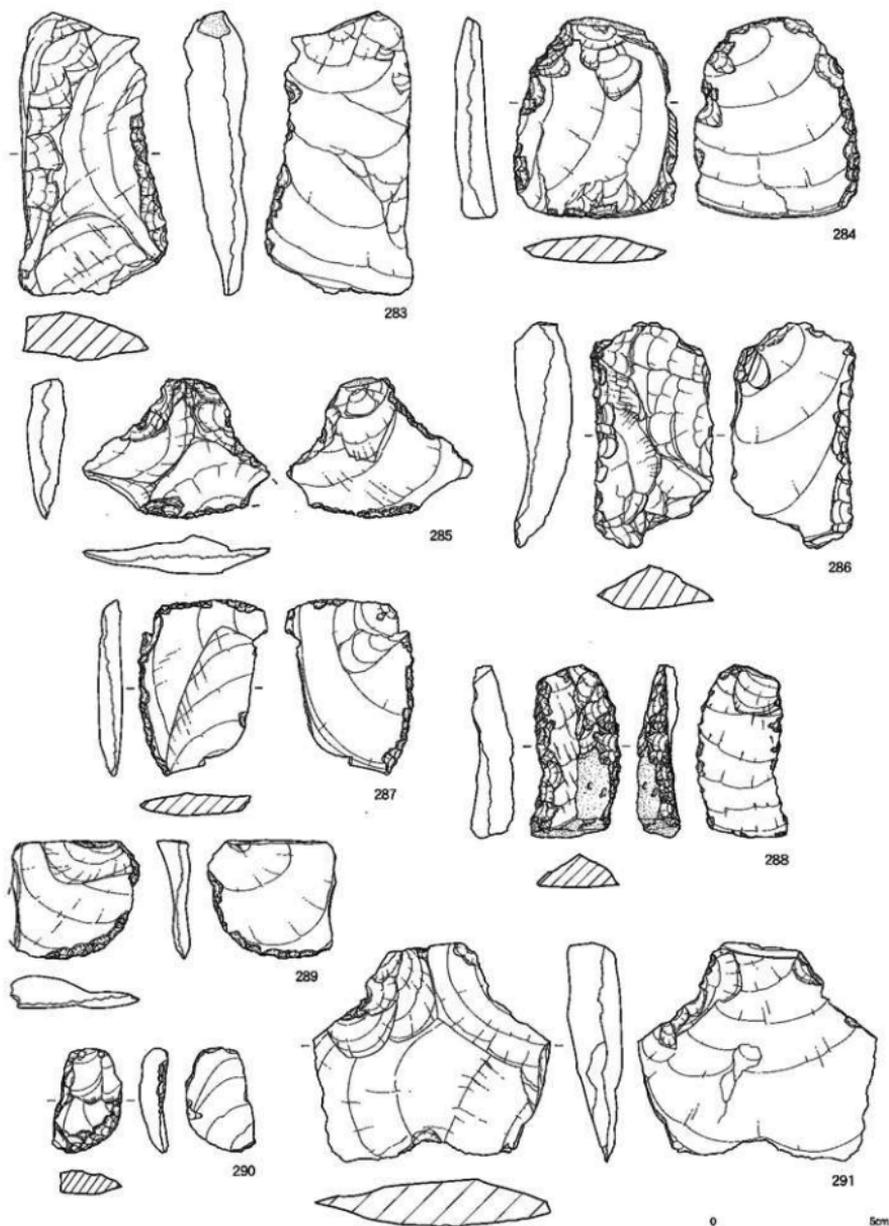
第 95 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器分布図【加工具・調理具】(S=1/750)



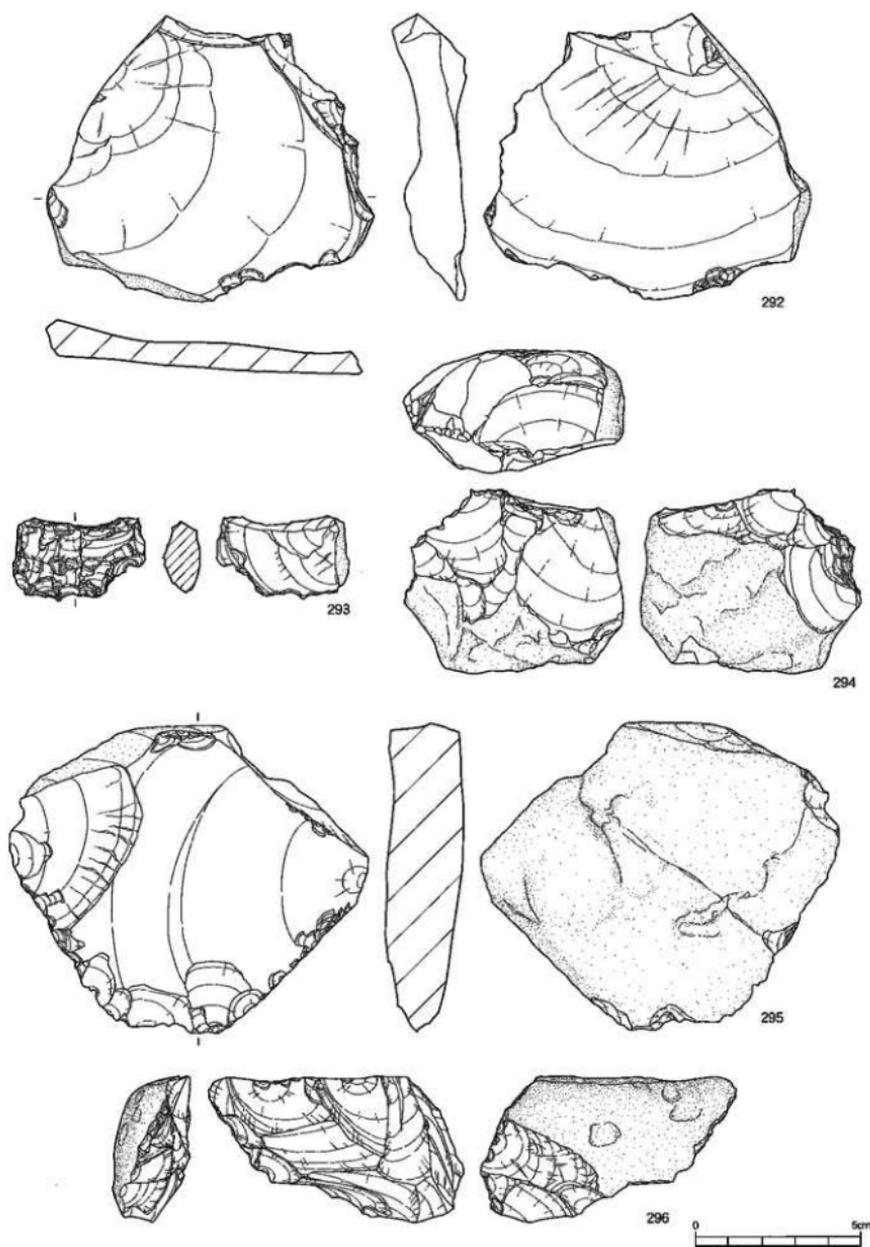
第96圖 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器実測図①(S=2/3)



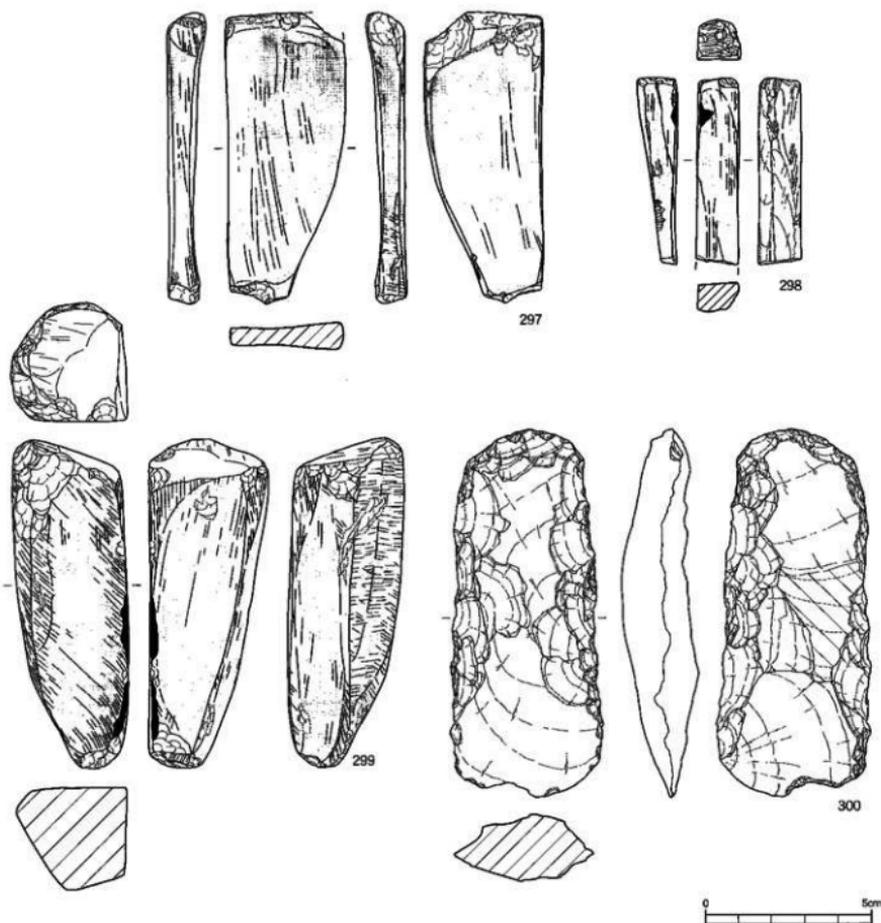
第 97 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器実測図②(S-2/3)



第 98 図 アカヤマ火山灰層上位遺物包含層出土石器実測図③(S=2/3)



第99圖 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器実測図④(S-2/3)

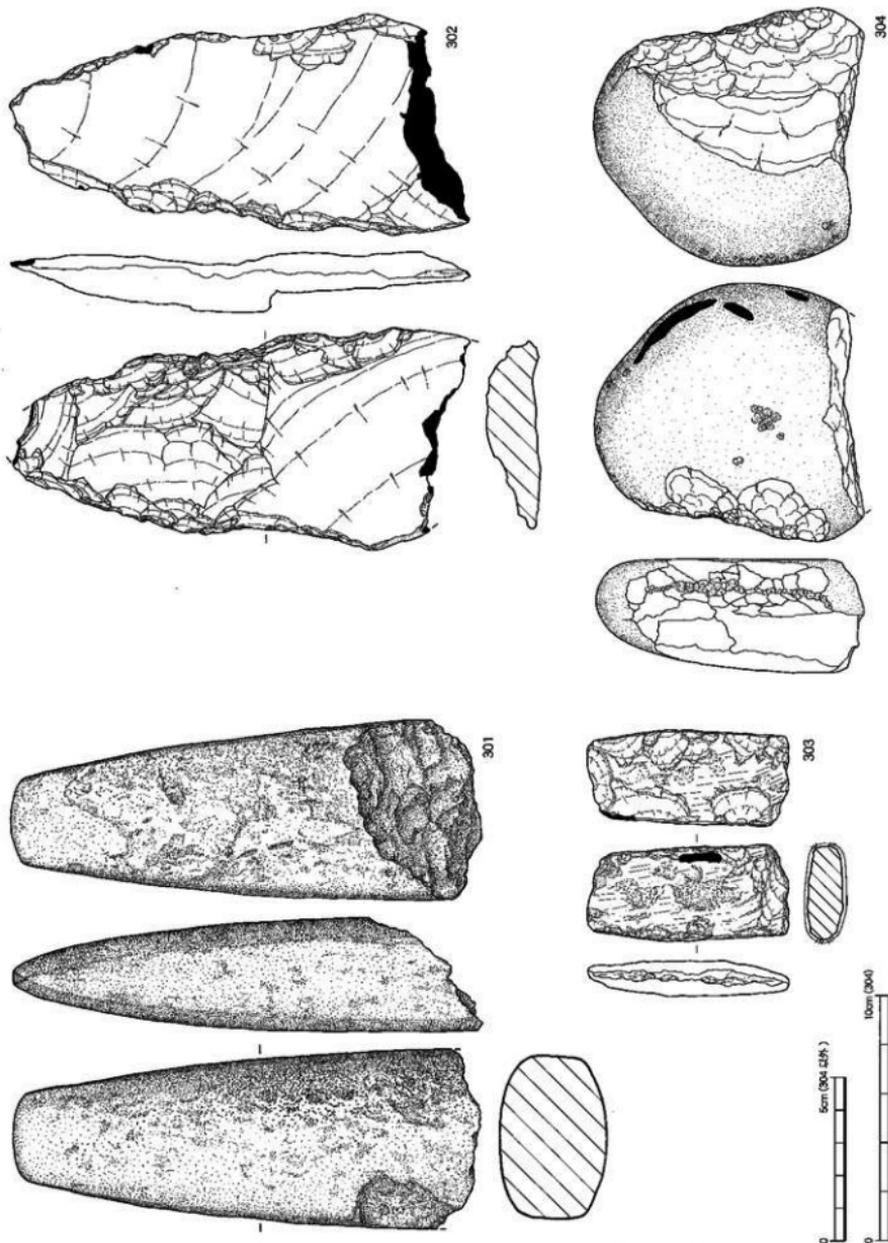


第 100 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器実測図⑤(S-2/3)

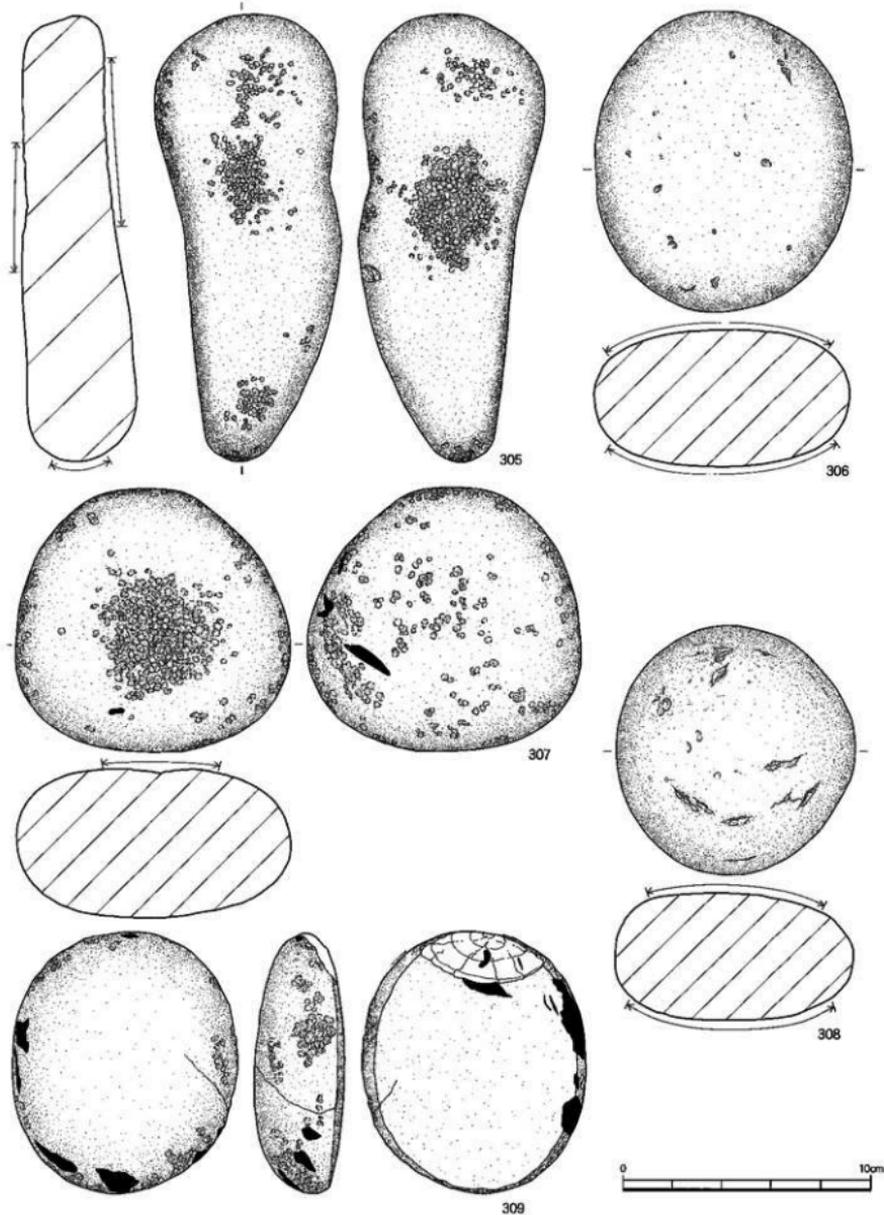
第 13 表 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器計測分類表

遺物 No.	整理 No.	器種	出土 グリッド	層位	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備 考
203	99	打製石鏃	E5	Ⅲ	チャート	(1.8)	1.25	0.5	(0.8)	先端部欠損
204	114	打製石鏃	E5	Ⅲ	チャート	(1.55)	1.75	0.6	(1.2)	先端部欠損
205	122	打製石鏃	F4	Ⅲ	黒曜石(桑ノ木津留)	(1.5)	(1.3)	0.2	(0.25)	脚部欠損
206	125	打製石鏃	F4	Ⅲ	黒曜石(桑ノ木津留)	(1.7)	1.45	0.45	(0.8)	先端部欠損
207	134	打製石鏃	E5	Ⅲ	黒曜石(針尾)	(1.4)	(1.15)	(0.35)	(0.5)	脚部欠損
208	104	打製石鏃	F4	Ⅲ	玉髓	2.7	2.0	0.45	2.41	
209	130	打製石鏃	F4	Ⅲ	チャート	1.85	1.5	0.2	0.5	
210	123	打製石鏃	F4	Ⅲ	黒曜石(桑ノ木津留)	(2.15)	(1.3)	0.3	(0.4)	脚部欠損

() の値は残存値を示す。



第 101 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器実測図⑥(S=2/3-1/2)



第 102 図 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器実測図⑦(S=1/2)

遺物 No.	整理 No.	器種	出土 グリッド	層位	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備 考
211	112	打製石鏃	E4	Ⅲ	黒曜石(針尾)	(1.7)	(1.55)	0.3	(0.5)	脚部欠損
212	106	打製石鏃	-	-	チャート	2.4	1.15	0.4	1.0	
213	113	打製石鏃	E5	Ⅲ	流紋岩	(2.25)	(1.4)	0.3	(0.59)	先端部・脚部欠損
214	121	打製石鏃	F3	Ⅲ	黒曜石(短島)	(2.55)	(1.4)	(0.4)	(1.05)	脚部欠損
215	102	打製石鏃	F3	Ⅲ	黒曜石(短島)	2.2	2.0	0.4	0.8	
216	135	打製石鏃	E6	Ⅲ	安山岩	(2.2)	(1.6)	(0.3)	(0.7)	先端部・脚部欠損
217	136	打製石鏃	F4	Ⅲ	チャート	(1.8)	(1.5)	(0.25)	(0.6)	脚部欠損
218	127	打製石鏃	F5	Ⅱ	流紋岩	(2.0)	(1.15)	0.3	(0.51)	脚部欠損
219	132	打製石鏃	D8	Ⅲ	黒曜石(短島)	(1.8)	(1.1)	0.2	(0.41)	脚部欠損
220	103	打製石鏃	F4	Ⅲ	チャート	2.35	1.2	0.3	0.4	
221	91	打製石鏃	A3	Ⅲ	黒曜石(短島)	2.35	1.65	0.8	1.4	
222	126	打製石鏃	F4	Ⅲ	黒曜石(短島)	(2.1)	(1.45)	(0.3)	(0.58)	脚部欠損
223	101	打製石鏃	E7	Ⅲ	黒曜石(短島)	1.55	1.4	0.4	0.38	
224	98	打製石鏃	E4	Ⅲ	黒曜石	1.8	1.4	0.25	0.4	
225	108	打製石鏃	E3	Ⅲ	黒曜石(針尾)	(1.55)	(1.1)	(0.3)	(0.3)	脚部欠損
226	118	打製石鏃	E5	Ⅲ	黒曜石(針尾)	(1.1)	1.35	0.3	(0.31)	先端部欠損
227	117	打製石鏃	E5	Ⅲ	黒曜石(針尾)	(2.1)	(1.65)	(0.35)	(0.8)	先端部・脚部欠損
228	92	打製石鏃	B6	Ⅲ	黒曜石(短島)	3.35	2.1	0.5	2.3	
229	120	打製石鏃	F3	Ⅲ	黒曜石(短島)	(1.7)	(1.45)	0.45	(0.71)	先端部・脚部欠損
230	129	打製石鏃	D8	Ⅲ	安山岩	1.55	(1.55)	0.3	(0.53)	脚部欠損
231	96	打製石鏃	D7	Ⅲ	流紋岩	2.0	1.7	0.35	0.8	
232	110	打製石鏃	E4	Ⅲ	黒曜石	(1.5)	2.0	0.45	(0.91)	先端部欠損
233	238	打製石鏃	-	-	砂岩	(1.65)	(1.25)	0.25	(0.5)	先端部・脚部欠損
234	93	打製石鏃	B8	Ⅲ	チャート	2.3	1.9	0.35	0.8	
235	105	打製石鏃	F4	Ⅲ	黒曜石(短島)	2.1	1.65	0.45	0.6	
236	116	打製石鏃	E5	Ⅲ	チャート	(3.1)	(1.6)	0.4	(0.76)	脚部欠損
237	100	打製石鏃	E4	Ⅲ	黒曜石	(1.5)	2.0	0.45	(0.91)	先端部欠損
238	95	打製石鏃	D2	Ⅲ	頁岩	1.85	1.65	0.4	1.1	
239	124	打製石鏃	F4	Ⅲ	黒曜石(針尾)	(1.65)	(1.9)	0.5	(1.24)	先端部・脚部欠損
240	116	打製石鏃	E5	Ⅲ	黒曜石(短島)	(1.7)	1.75	0.3	(0.48)	先端部欠損
241	109	打製石鏃	E4	Ⅲ	黒曜石(短島)	(1.5)	(1.4)	0.45	(0.53)	脚部欠損
242	107	打製石鏃	D5	Ⅲ	黒曜石(短島)	(0.9)	(1.05)	0.2	(0.09)	脚部欠損
243	111	打製石鏃	E4	Ⅲ	安山岩	(1.8)	(1.55)	0.35	(0.66)	脚部欠損
244	94	打製石鏃	C2	Ⅲ	玉髓	1.3	2.35	0.3	0.3	
245	133	打製石鏃	E5	Ⅲ	黒曜石(短島)	(1.3)	(1.4)	0.3	(0.48)	先端部・脚部欠損
246	119	打製石鏃	E6	Ⅲ	安山岩	(1.8)	(1.6)	0.3	(0.6)	脚部欠損
247	147	磨製石鏃	E4	Ⅲ	頁岩	(1.75)	(1.35)	0.2	(0.4)	脚部欠損
248	145	磨製石鏃	B5	Ⅲ	緑色頁岩	(2.7)	(1.9)	0.2	(1.3)	先端部欠損
249	148	磨製石鏃	-	Ⅲ	安山岩	(2.45)	(1.75)	0.2	(1.0)	脚部欠損
250	146	磨製石鏃	D6	Ⅲ	千枚岩	(2.1)	(1.45)	0.25	(0.7)	再生品・脚部欠損
251	128	磨製石鏃	D5	Ⅲ	粘板岩	3.15	2.3	0.45	3.1	
252	143	石鏃未製品	F4	Ⅲ	チャート	(1.8)	(1.9)	(0.35)	(0.89)	先端部・基部欠損
253	139	石鏃未製品	E5	Ⅲ	頁岩	3.0	2.3	0.95	6.16	
254	140	石鏃未製品	E6	Ⅲ	頁岩	2.9	2.2	0.6	2.98	
255	138	石鏃未製品	D7	Ⅲ	黒曜石(腰岳)	1.7	1.9	0.8	2.48	
256	137	石鏃未製品	C7	Ⅲ	黒曜石(腰岳)	1.25	1.75	0.4	0.9	
257	144	石鏃未製品	-	Ⅲ	黒曜石(針尾)	2.2	1.6	0.9	2.24	
258	142	石鏃未製品	F4	Ⅲ	黒曜石(針尾)	1.95	1.6	0.55	1.45	
259	131	石鏃未製品	-	Ⅲ	黒曜石(短島)	2.6	1.55	0.5	1.49	
260	141	石鏃未製品	F2	Ⅲ	黒曜石(短島)	2.6	2.15	1.35	5.69	
261	97	石鏃未製品	E3	Ⅲ	安山岩	(1.55)	(1.5)	0.3	(0.68)	脚部欠損

() の値は残存値を示す。

遺物 No.	整理 No.	器種	出土 グリッド	層位	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備 考
262	163	石鏝	E5	Ⅲ	チャート	(3.7)	(2.1)	0.65	(2.1)	基部欠損
263	162	石鏝	E3	Ⅲ	チャート	4.25	3.4	1.35	10.87	
264	166	石鏝	-	Ⅲ	チャート	2.5	1.8	0.7	2.2	
265	165	石鏝	-	Ⅲ	流紋岩	2.0	1.5	0.45	0.91	
266	164	石鏝	E6	Ⅲ	流紋岩	3.1	(2.2)	0.6	(2.9)	基部欠損
267	161	石鏝	E2	Ⅲ	黒曜石(姫島)	2.25	1.7	0.55	1.6	
268	152	石匙	E4	Ⅲ	チャート	(6.3)	(2.9)	1.2	(17.4)	刃部欠損
269	156	石匙	E6	Ⅲ	頁岩	(3.8)	1.9	0.8	(3.9)	下半部欠損
270	153	石匙	E5	Ⅲ	頁岩	4.7	2.9	0.7	2.7	
271	150	石匙	E4	Ⅲ	黒曜石(姫島)	4.1	1.8	0.75	4.0	
272	151	石匙	E4	Ⅲ	黒曜石(姫島)	5.0	3.0	0.9	8.0	
273	149	石匙	C1	Ⅲ	安山岩	3.7	1.5	0.65	3.8	
274	155	石匙	E5	Ⅲ	玉髄	4.15	1.9	0.8	5.5	
275	157	石匙	-	Ⅲ	頁岩	3.5	3.45	0.7	6.0	
276	387	石匙	E5	-	頁岩	2.3	3.9	0.6	3.4	
277	158	石匙	-	Ⅲ	黒曜石(姫島)	2.75	3.0	0.5	2.6	
278	154	石匙	E5	Ⅲ	黒曜石(姫島)	(2.65)	(3.4)	0.8	(4.9)	刃部欠損
279	159	石匙	-	Ⅲ	黒曜石(姫島)	2.75	3.4	0.95	6.7	
280	174	スクレイパー	E6	Ⅲ	チャート	4.15	2.55	1.1	9.9	
281	170	スクレイパー	E5	Ⅲ	頁岩	4.7	3.35	0.95	0.66	
282	171	スクレイパー	E5	Ⅲ	頁岩	2.9	1.8	0.75	2.2	
283	173	スクレイパー	E6	Ⅲ	頁岩	8.7	4.5	1.95	70.6	
284	172	スクレイパー	E6	Ⅲ	頁岩	6.2	5.0	1.25	40.0	
285	176	スクレイパー	-	Ⅲ	頁岩	4.35	(5.65)	1.2	(18.7)	刃部欠損
286	169	スクレイパー	E3	Ⅲ	頁岩	6.95	3.75	1.7	38.9	
287	168	スクレイパー	D7	Ⅲ	頁岩	5.4	4.0	0.7	14.7	
288	177	スクレイパー	-	Ⅲ	黒曜石(巖岳)	5.3	2.7	1.3	15.5	
289	175	スクレイパー	F2	Ⅲ	凝灰岩	3.75	(3.9)	1.0	(7.8)	体部欠損
290	167	スクレイパー	C1	Ⅲ	黒曜石(姫島)	3.25	2.15	0.9	4.4	
291	183	剥片	E6	Ⅲ	砂岩	6.7	7.25	1.7	67.0	
292	182	剥片	C1	Ⅲ	安山岩	8.8	10.0	2.2	119.9	
293	412	石核	D3	Ⅲ	チャート	2.5	4.0	1.1	14.94	
294	414	石核	E5	Ⅲ	砂岩	5.6	6.8	4.3	191.68	
295	425	石核	D6	Ⅱ	頁岩	9.5	10.9	2.3	302.6	
296	415	石核	E6	Ⅲ	頁岩	4.5	7.8	2.35	79.94	
297	181	砥石	-	Ⅲ	粘板岩	(8.95)	(3.7)	1.2	(47.8)	
298	180	砥石	E6	Ⅲ	粘板岩	(5.7)	(1.3)	1.25	(11.4)	
299	179	砥石	D7	Ⅲ	砂岩	10.1	3.6	3.6	167.8	
300	417	打製石斧	D6	Ⅱ	安山岩	11.3	4.65	2.4	125.76	
301	56	打製石斧	C2	Ⅲ	砂岩	14.3	5.6	3.4	382.7	
302	416	打製石斧	C3	Ⅲ	ホルンフェルス	(14.0)	6.8	1.85	(137.8)	
303	178	磨製石斧	D6	Ⅲ	ホルンフェルス	6.2	3.0	1.1	31.45	
304	421	砥石	E4	Ⅲ	砂岩	(10.9)	(10.55)	4.6	(692.1)	
305	422	砥石	F5	Ⅱ	ホルンフェルス	18.45	7.65	4.6	835.3	
306	419	砥石	D6	Ⅲ	尾鈴山酸性岩	12.3	10.3	5.6	1081.6	
307	434	磨石	-	-	砂岩	10.75	11.15	6.2	1039.5	
308	418	磨石	D6	Ⅲ	尾鈴山酸性岩	10.20	9.65	5.2	760.8	
309	420	磨石	D3	Ⅲ	砂岩	10.7	9.1	3.65	505.5	

() の値は残存値を示す。



SI-1



SE-1

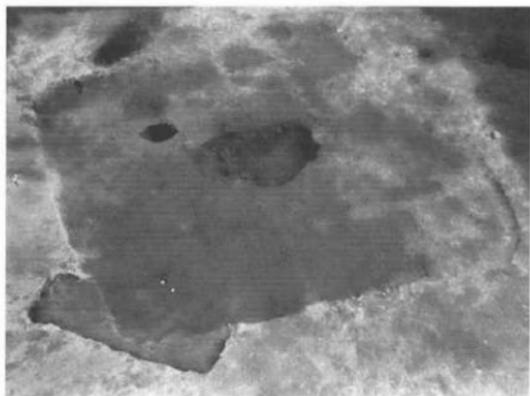


SA-1①

写真図版 37 アカホヤ火山灰層上位検出遺構①



SA-1②



SA-1③



SC-8

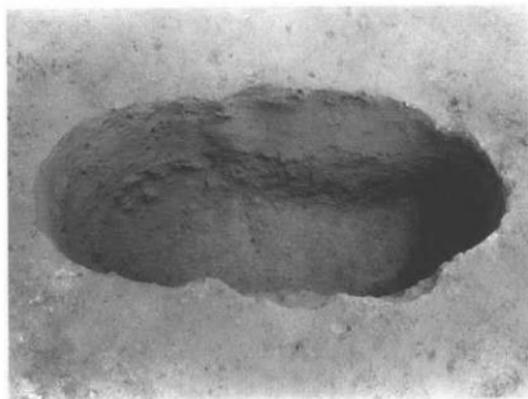
写真図版 38 アカホヤ火山灰層上位検出遺構②



SC-15



SC-25



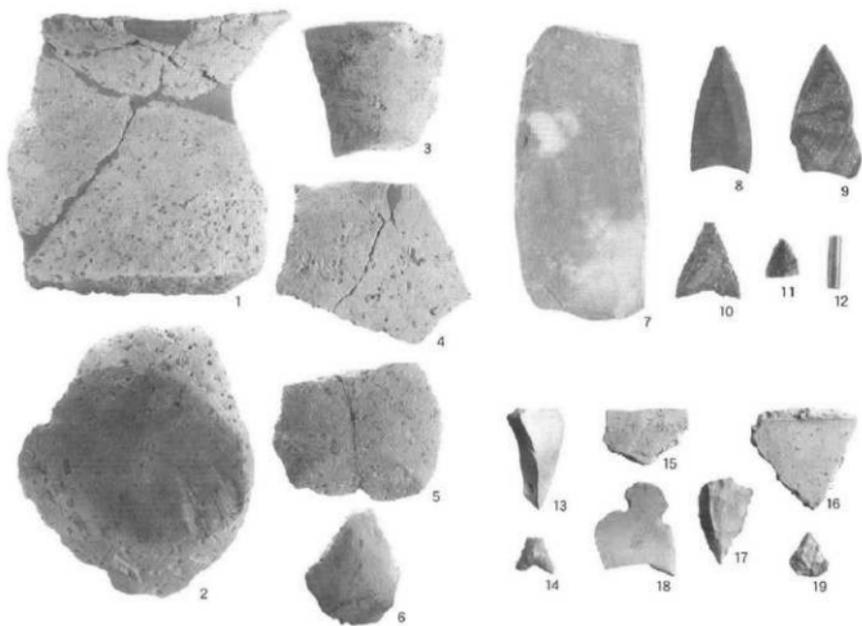
SC-14

写真図版 39 アカホヤ火山灰層上位検出遺構③

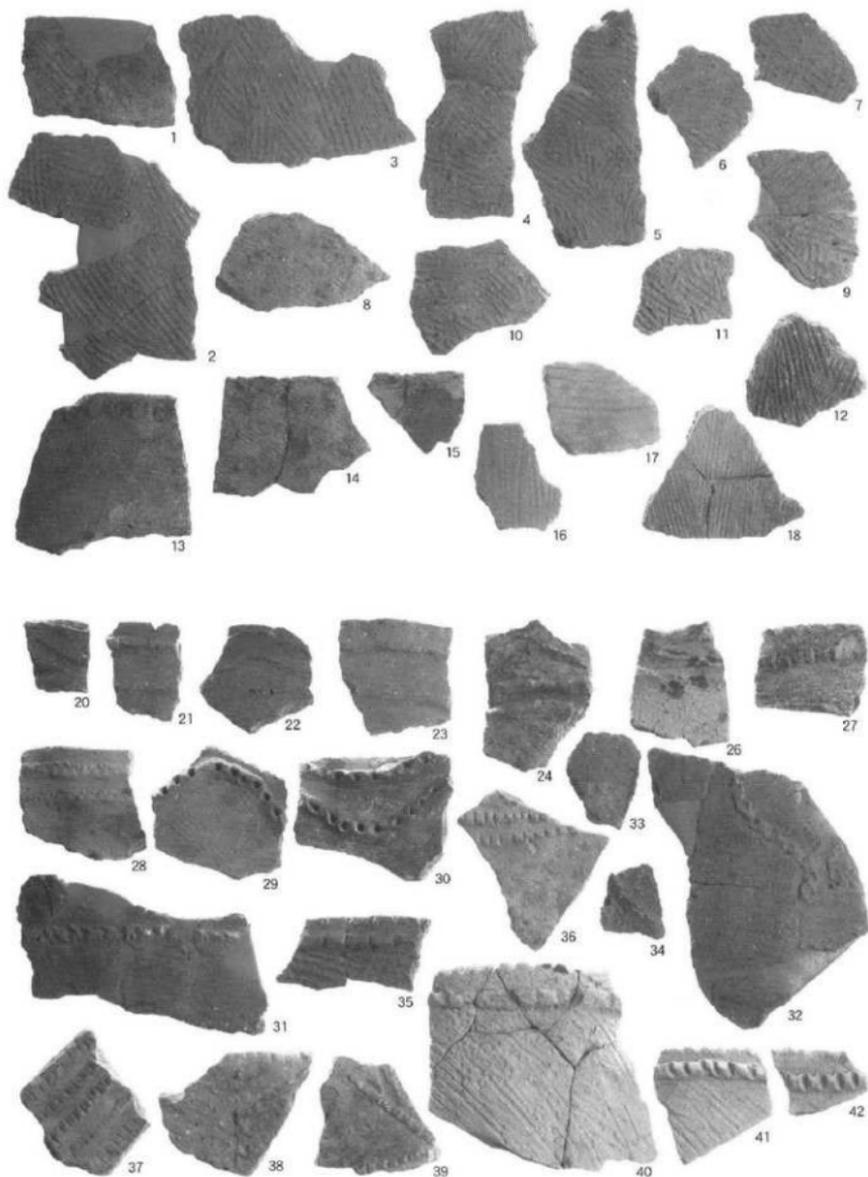


SC-5

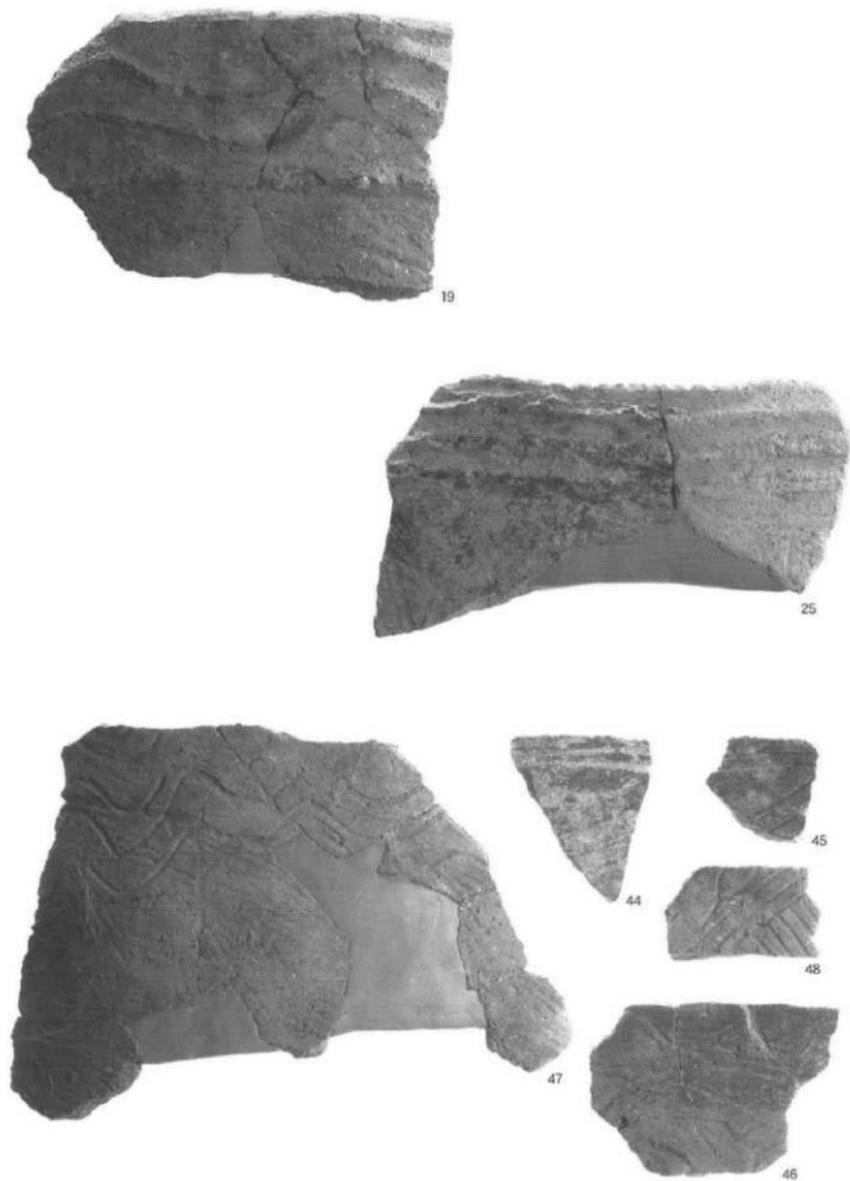
写真図版 40 アカホヤ火山灰層上位検出遺構④



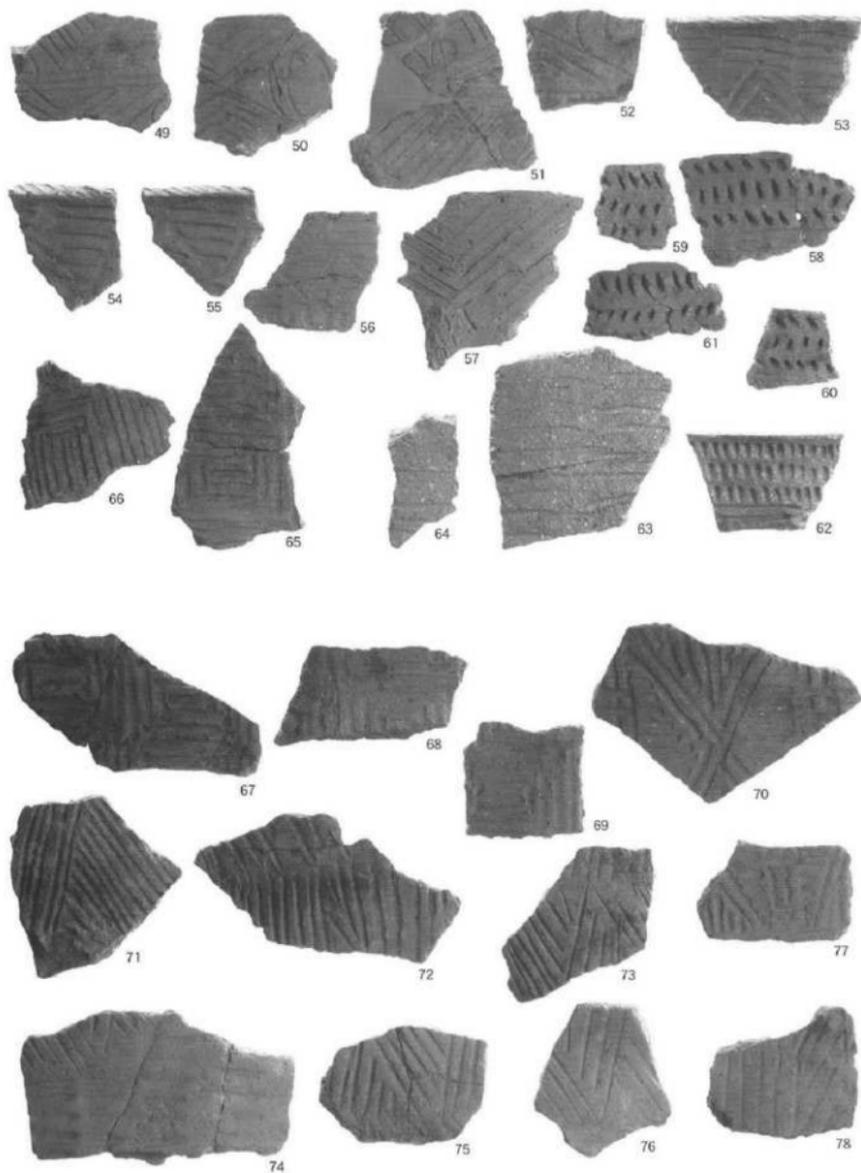
写真図版 41 アカホヤ火山灰層上位検出遺構内出土遺物



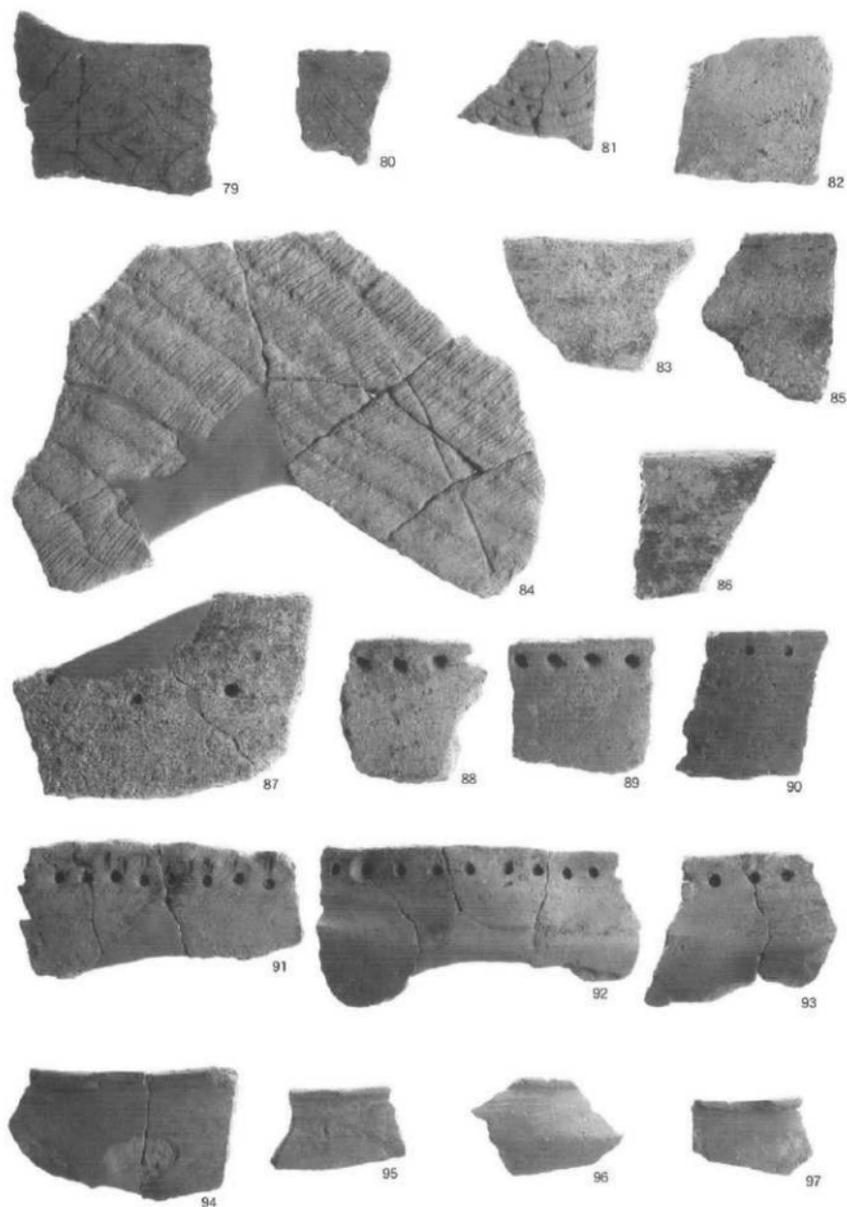
写真図版 42 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土縄文土器①



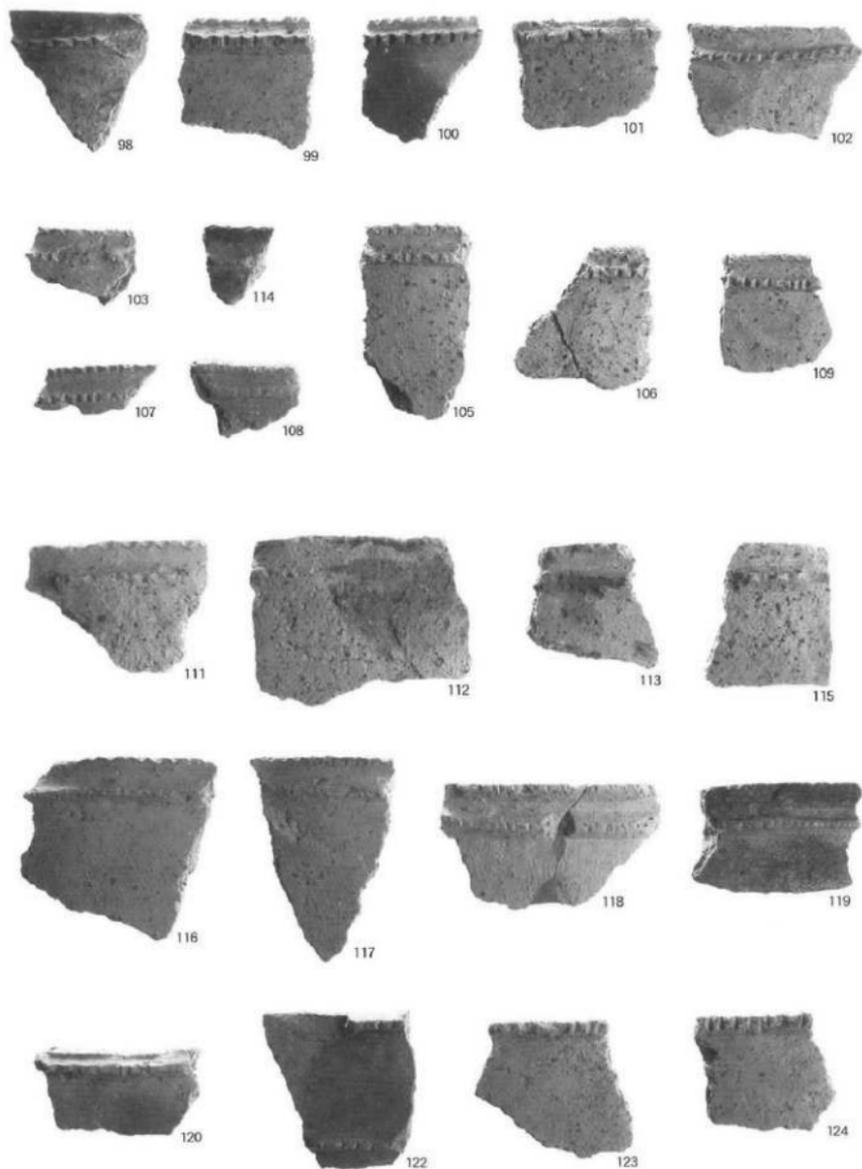
写真図版 43 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土縄文土器②



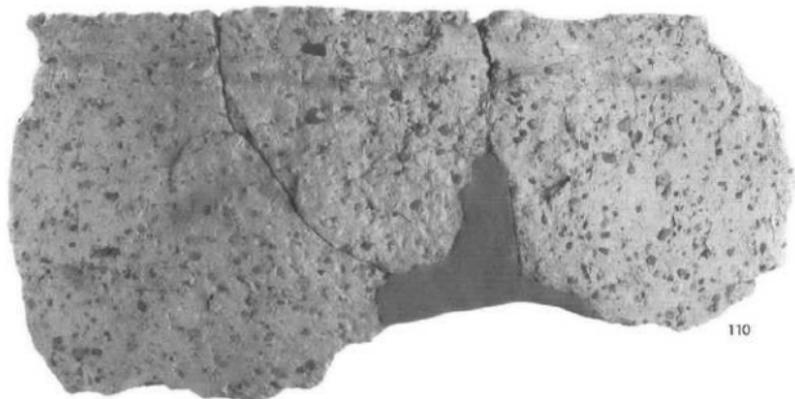
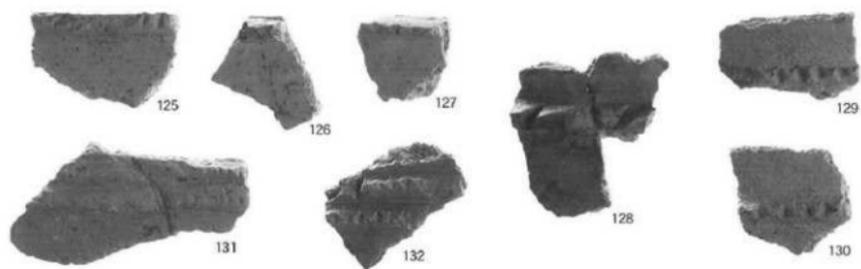
写真図版 44 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土縄文土器③



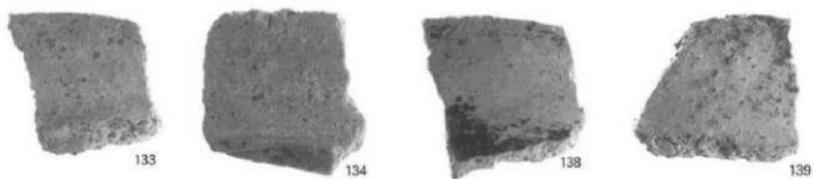
写真図版 45 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土縄文土器④



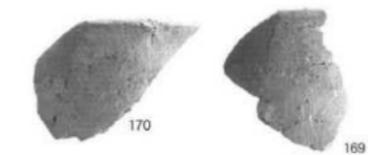
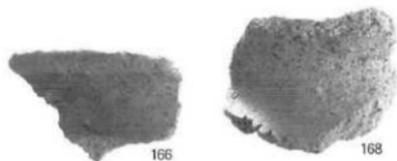
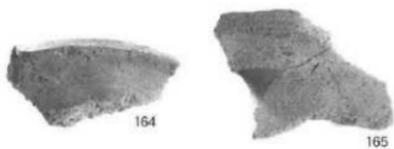
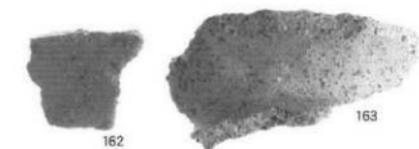
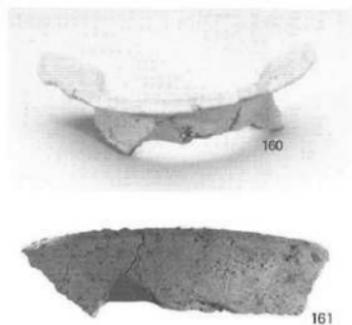
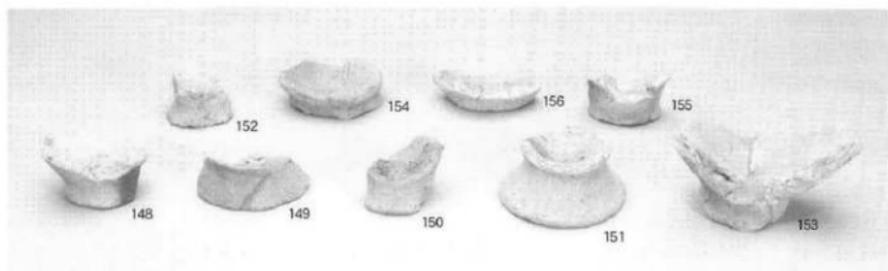
写真図版 46 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器<<弥生時代以降>>①



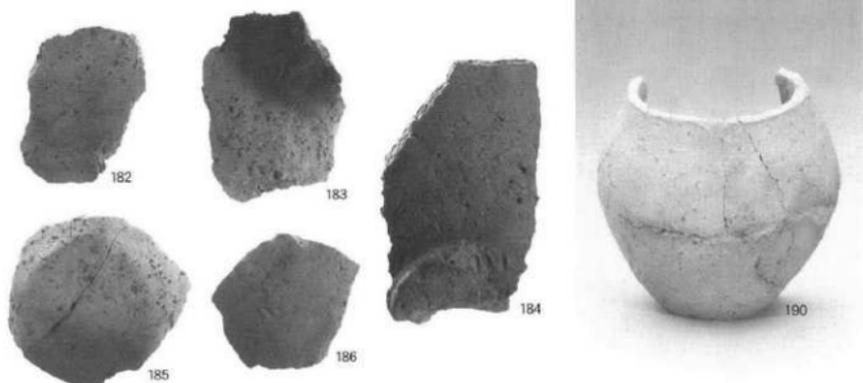
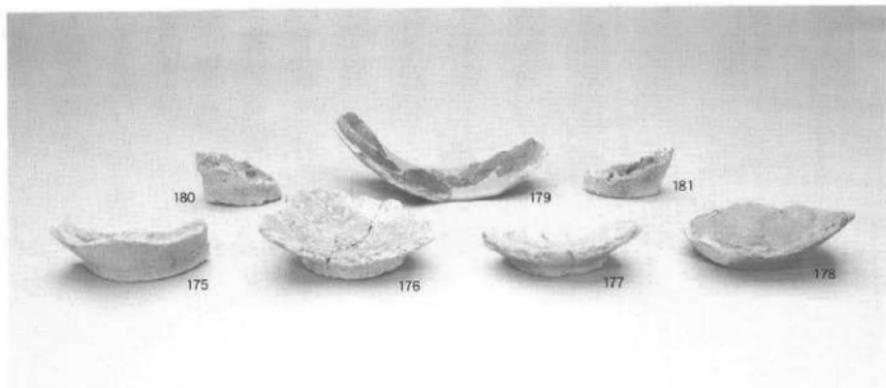
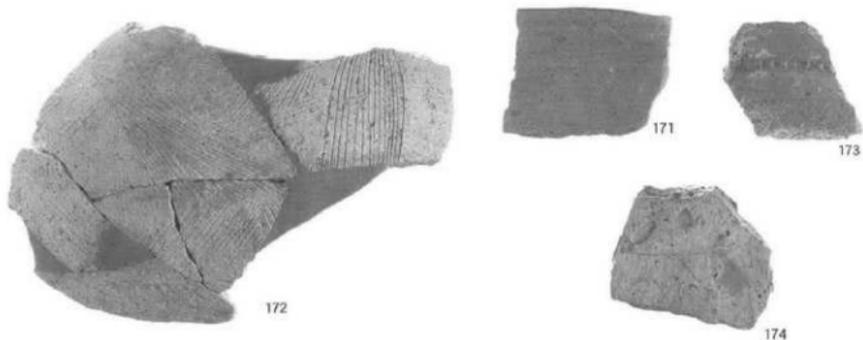
写真図版 47 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器<弥生時代以降>②



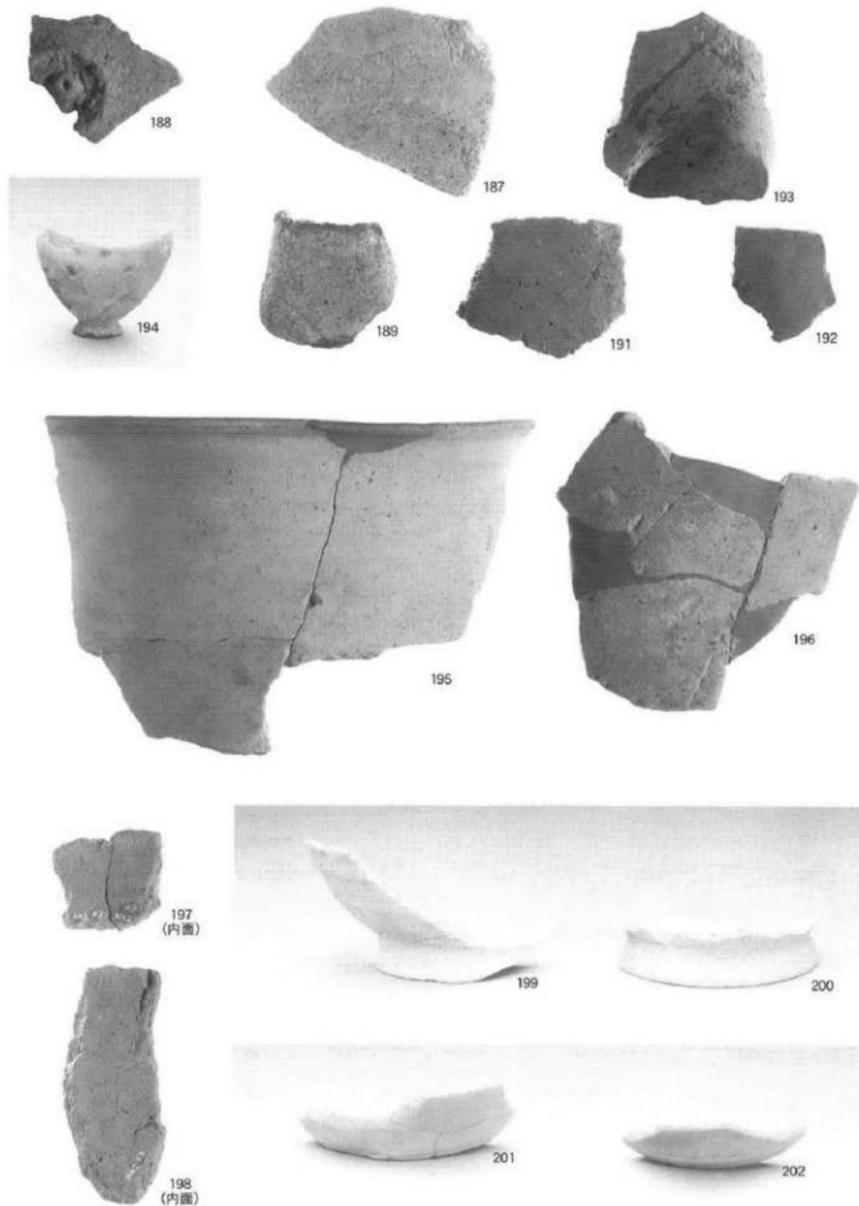
写真図版 48 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器<弥生時代以降>③



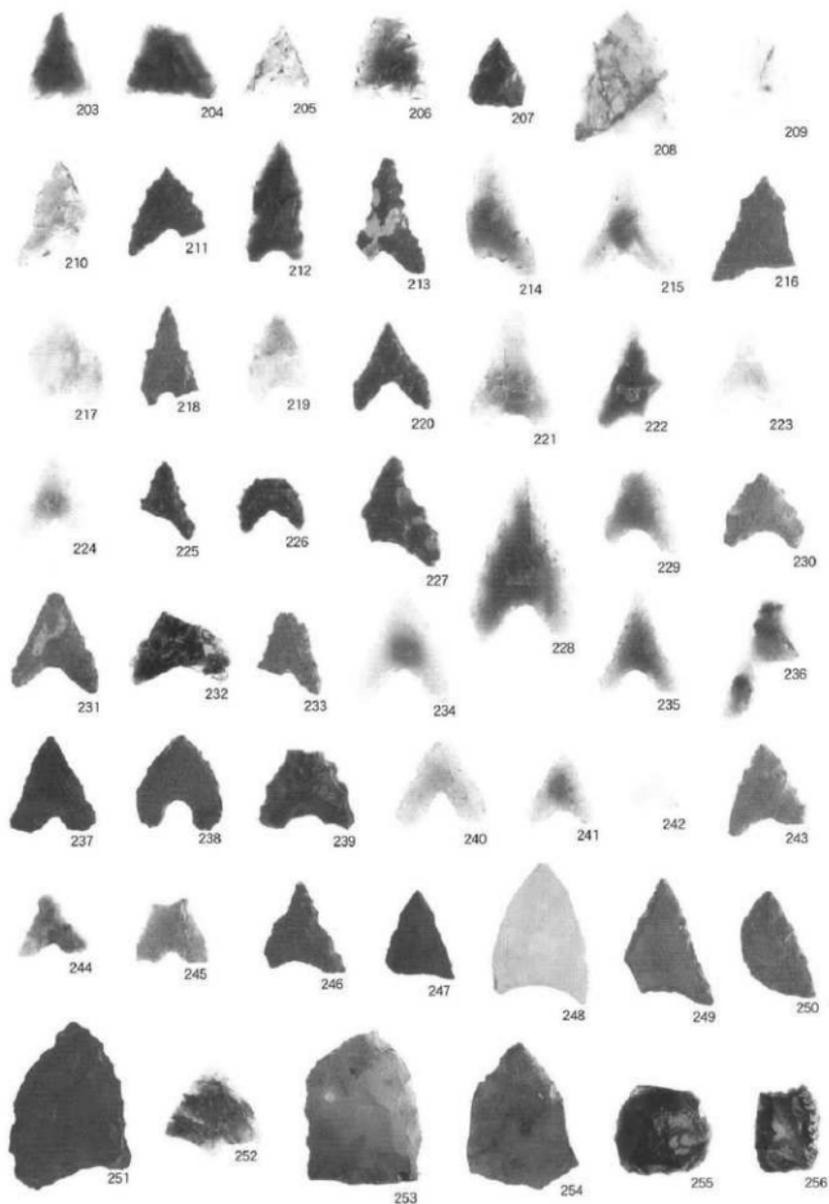
写真図版 49 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器<弥生時代以降>④



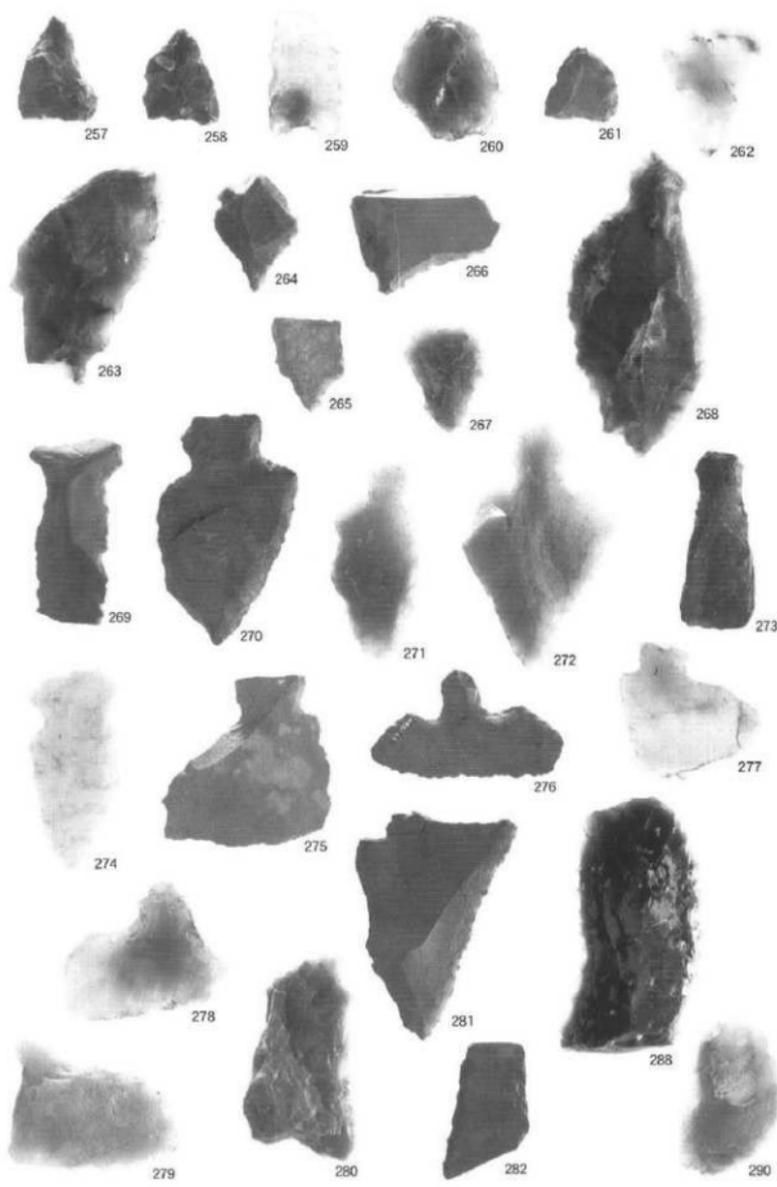
写真図版 50 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器<弥生時代以降>⑤



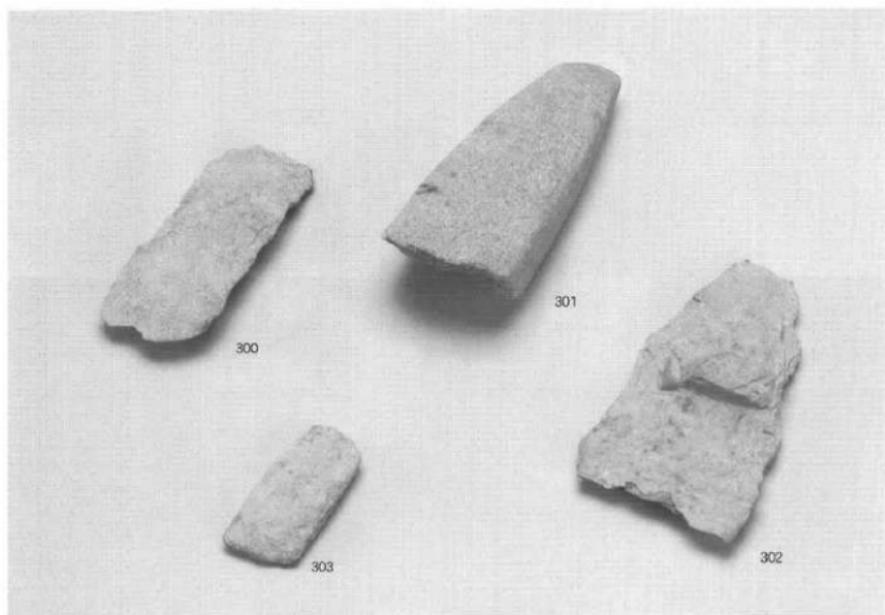
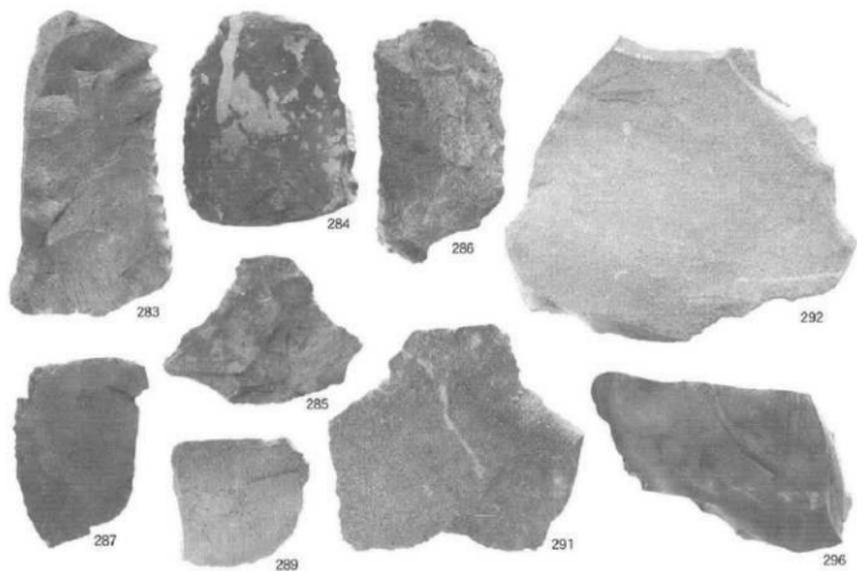
写真図版 51 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器<弥生時代以降>⑥



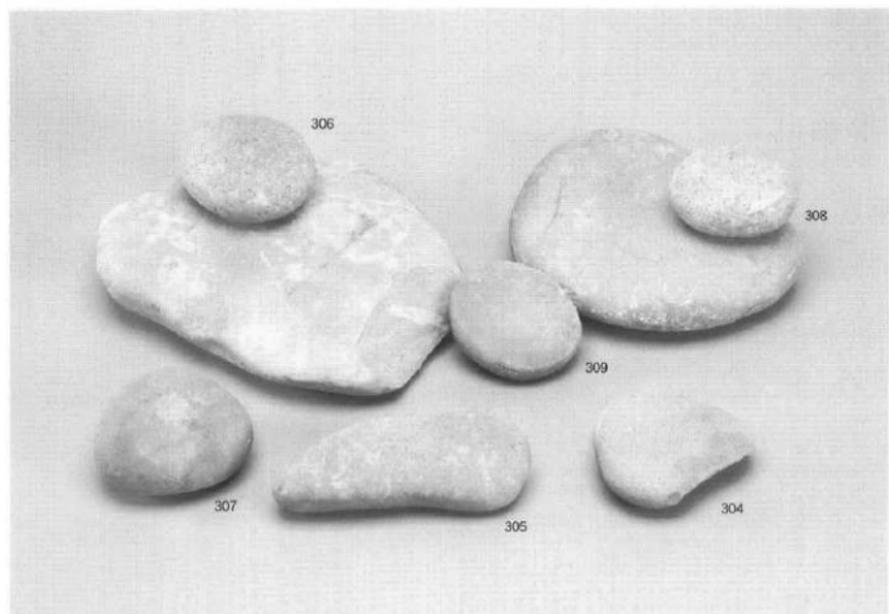
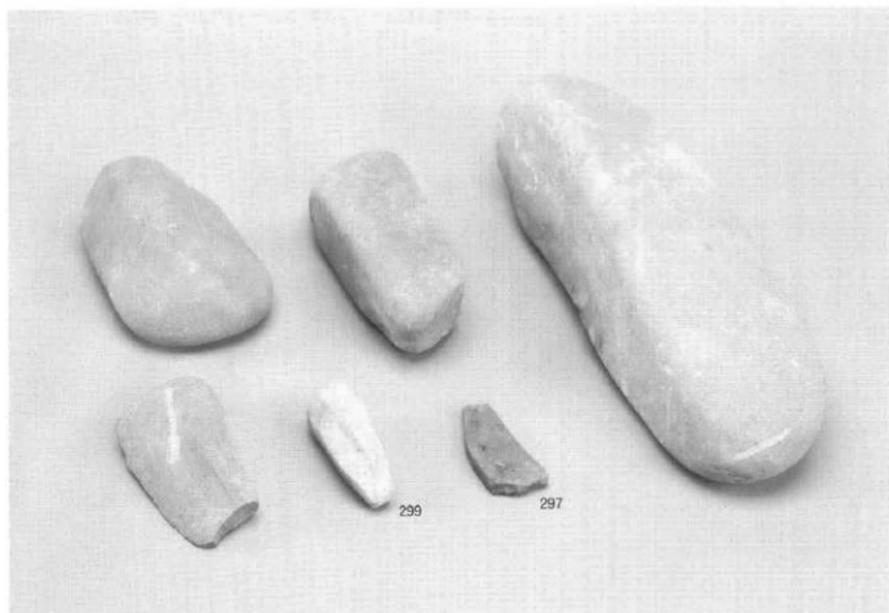
写真図版 52 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器①



写真図版 53 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器②



写真図版 54 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器③



写真図版 55 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器④

5th Period

第V章 まとめ

滑川第2遺跡のナイフ形石器文化について

滑川第2遺跡では小林軽石層下位の10層を中心にナイフ形石器文化期の石器群・礫群が検出された。ナイフ形石器は瀬戸内技法により製作される国府型ナイフ(A類)と縦長の基部加工ナイフ(B類)が特徴的である。また船引原台地においてナイフ形石器文化期の遺物が確認された遺跡は13遺跡存在する中で、出土例の少ない剥片尖頭器が出土したことも注目される。

同台地上に近接する坂元遺跡のナイフ形石器文化期の遺物・礫群の検出層は本遺跡の基本層序に対比すると10層下部～11層にかけてであり、本遺跡の石器群の出土位置より下位にあたる。また出土したナイフ形石器は切り出し型のナイフ形石器が主体であり、本遺跡のナイフ形石器とは様相が異なる。以上のことから本遺跡の石器群については、坂元遺跡の石器群に後出するものと考えられ、宮崎県旧石器時代10段階編年案の第6段階に当たる石器群と考えられる(註1)。

註1 宮崎県旧石器文化研究会 2005 「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66号 pp. 47～62 旧石器文化研究会

アカホヤ火山灰層前後の石器群について

本遺跡は隣接する滑川第1遺跡と同様にアカホヤ火山灰層を挟んで上下の層から多量の遺物が検出された。また本遺跡においてもアカホヤ上位の遺物包含層からは縄文前期の土器が多量に出土しており、石器についても主体は縄文前期のものであると考えられる。先に報告書の刊行された滑川第1遺跡の報文の中でアカホヤ火山灰層前後の石器の比較を行い、いくつかの特徴を提示した。そこで本遺跡においても同様の分析をおこなってみる。

①石器組成の割合の変化について

石器製品類に注目して道具ごとの割合を比較すると第14表のようになる。狩猟具の割合は縄文早期からアカホヤ上位において減少し、工具・堅果類調理具は逆に増加している。この結果については滑川第1遺跡と同様であるが、その増減率は異なっている。

第14表 滑川第2遺跡出土石器の割合(%)

縄文早期：製品289点			アカホヤ火山灰層上位：製品181点				
狩猟具	72.7	石鏃	71.3	狩猟具	42.6	石鏃	42.6
		尖頭状石器	1				
		尖頭器	0.4				
工具	9.3	石錐	3.8	工具	30.3	石錐	3.4
		石匙	1			石匙	7.8
		スクレイパー	3.5			スクレイパー	12.8
		石斧	1			石斧	2.3
堅果類調理具	16.6	砥石	14.9	堅果類調理具	27.1	砥石	4
		磨石				20.4	
		石皿	1.7			磨石	6.7
その他	1.4	快入石器	0.4	その他		石皿	
		異形石器	1				

②石鏃の使用石材について

石鏃の使用石材についてはアカホヤ下位から上位にかけていくつかの石材の使用率の増減が見られたが、さほど大きな変化という印象は受けない。

それよりも本遺跡の姫島産黒曜石の使用率の高さが注目される。本遺跡の縄文早期の遺物包含層から出土した土器は早期後半～終末にかけての資料が多く、この時期に姫島産黒曜石の使用率が増加し、その使用がアカホヤ火山灰降灰後も高い比率で続くということがいえるであろう。この点については本遺跡の状況からの仮説であり、この様相が地域的な様相かどうかを改めて検討する必要があるだろう。

第15表 滑川第2遺跡出土石鏃の使用石材の割合(%)

縄文早期：206点			アカホヤ火山灰層上位：77点		
	チャート	20.9		チャート	22
黒曜石	桑ノ木津留産	13.1	黒曜石	桑ノ木津留産	7.8
	姫島産	34		姫島産	24.7
	西北九州産	14		西北九州産	18.2
	鹿児島産	0		鹿児島産	1.3
	安山岩・サヌカイト	13.6		安山岩・サヌカイト	9.1
	流紋岩・頁岩	2.9		流紋岩・頁岩	10.4
	玉髄	0.5		玉髄	2.6
	その他	1		その他	3.9

刻目突帯文土器について

滑川第2遺跡では弥生時代以降の遺物として、弥生時代前期末～中期初頭頃の刻目突帯文土器、弥生時代中期後半～後期前半の中溝式土器、弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器、古代の土師器が出土した。特に弥生時代前期末～中期初頭頃の刻目突帯文土器は、県下でも出土例が少なく、包含層中ではあるが比較的まとまった量が出土しているため注目される。そこで、まとめにかえて本遺跡から出土した刻目突帯文土器について考察を行なう。

本文中で、刻目突帯文をもつ壺形土器を6つに分類した。Ⅰ・Ⅱ類は口唇部の刻目の有無に違いはあるが、直立口縁、刻目突帯、外面ハケメ調整といったいわゆる「下城式」の諸要素を有する一群である。Ⅲ・Ⅳ類は突帯の形成方法で分類したが、形態は類似しており、2条の刻目突帯をもつものとして捉えられる。Ⅴ類・Ⅵ類も突帯の形成方法に違いはあるものの、1条の刻目突帯をもつものとして捉えられる。この土器群にはいわゆる「亀ノ甲タイプ」(図88 122)も一部含まれている。

また、本遺跡で出土した資料のうち、他の器種で刻目突帯文を施す壺形土器と同時期のものとして捉えられるものとして、胴部に文様を施す壺形土器(図90 172～174)が挙げられる。172は文様を施す工具に違いが見られるものの大分県武蔵町熊尾遺跡出土の壺形土器に類似する。173は高鍋町持田中尾遺跡、174は宮崎市保木下遺跡など刻目突帯文土器が出土している遺跡で類例が見られる。他の壺形土器に関しては小破片のものやあまり特徴がないものが多いため、時期の特定は困難であった。なお、壺形土器以外の器種に関しては弥生時代前期末～中期初頭以外の時期に抽出することが可能であるため、当時期に該当するものは含まれないと思われる。

当時期の遺跡として、県下では前述した持田中尾遺跡、保木下遺跡をはじめ、都城市高崎町今村遺跡、宮崎市垣下遺跡などが挙げられるが、多くが包含層中から出土した資料で堅穴住居跡などから出土した一括資料はあまり多くない。さらに一括資料であっても、出土量が少なく良好なセット関係を捉えられるものはあまり検出されてない。また他の遺跡で包含層中から出土した資料を見てみると、刻目突帯文土器の前後にあたる時期の土器が含まれている遺跡が多く、特定時期の土器の抽出が困難であることが多い。本遺跡では刻目突帯文土器の前時代の土器は御領式・黒川式で、後の時代の土器は中溝式であるため、今回の資料は比較的短期間に存在していた土器群として抽出することが可能であると考えられる。このような見解のもと、今回出土した資料の形態や組成について詳しくみていきたい。

宮崎県域における弥生時代の土器編年は石川悦雄氏によって提示されている(註2)が、今回出土した資料を氏の編年に対応させると、Ic期～IIa期に該当する。Ic期の資料は本論でのⅡ・Ⅲ類、IIa期の資料はⅠ・Ⅳ・Ⅴ類にあたる。しかし、この時期区分は主に持田中尾遺跡の資料の中から古相をしめすものと新相をしめすものを分離したものであり、層位や一括資料などによる保証がされていない点が問題となってくる。前述した理由から今回の資料を比較的短期間に存在していた土器群として抽出することが可能であれば当時期の組成を再検討することが必要であると思われる。また、本遺跡と同様な条件をもつ今村遺跡は、本論のⅢ・Ⅳ・Ⅴ類の壺で構成されるが、本遺跡の土器に比べ口縁端部に接する突帯が長大化しており、入来式に形態が近づいている。このことから考えると、今村遺跡の資料が本遺跡出土の資料に後続する土器群として捉えることが可能ではないかと思われる。ただし、今回の案はあくまで包含層中の資料を用いた検討であるため、今後一括資料による検証作業が必要であることは言うまでもない。良好な一括資料の出土をまって再度検討したい。

註2 石川悦雄 1984 「高鍋平野における弥生土器編年試案—素樸—」(M.k. II) 『宮崎考古』第9号 pp.1～17 宮崎考古学会

山陰系土器(図91 188)について

図91 188の土器は高坏の坏底部の破片であるが、坏部と脚部の接合方法を観察することができる良好な資料である。この土器の接合方法を観察すると、坏部に円盤充填を施したのち、充填部分中央に軸心をおいていることが理解できる。こういった接合方法は古墳時代前期に山陰地方でみられる高坏の製作技術であることが従来から指摘されている(註3)。宮崎県域において同様な接合方法をもつ高坏は、都城市城ヶ尾遺跡で出土している(註4)。また、城ヶ尾遺跡では、山陰系の二重口縁壺も出土していることが注目される。今回の資料は、小破片のため詳細な検討はできなかったが、当地域と他地域の交流を窺い知るうえで有効な資料であると考えられる。

註3 次山洋 2000 「土器からみた諸変革」『国家形成過程の諸変革』考古学研究会例会シンポジウム記録集 pp.55～73 考古学研究会

註4 奥田光博 2006 「城ヶ尾遺跡」『都城市史 資料編 考古』pp.508～509 都城市

なお、城ヶ尾遺跡の資料を都城市教育委員会加賀野一氏の高配により実現させていただいた。実現の結果、城ヶ尾遺跡出土の高坏は充填部分に軸心をおくものであることを確認した。

I. 放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	NK 2 SI-2	炭化物	酸-7000-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.2	NK 2 SI-5	炭化物	酸-7000-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.3	NK 2 SI-19	炭化物	酸-7000-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.4	NK 2 SI-38	炭化物	酸-7000-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦) (1 σ : 68%確率, 2 σ : 95%確率)
No.1	8230 \pm 40	-27.7	8190 \pm 40	交点: cal BC 7175 1 σ : cal BC 7290 ~ 7090 2 σ : cal BC 7320 ~ 7070
No.2	6350 \pm 40	-28.6	6290 \pm 40	交点: cal BC 5290 1 σ : cal BC 5310 ~ 5255 2 σ : cal BC 5330 ~ 5220
No.3	8180 \pm 40	-24.3	8190 \pm 40	交点: cal BC 7175 1 σ : cal BC 7290 ~ 7090 2 σ : cal BC 7320 ~ 7070
No.4	8150 \pm 120	-27.8	8100 \pm 120	交点: cal BC 7070 1 σ : cal BC 7275 ~ 7230, 7195 ~ 7030 6865 ~ 6855 2 σ : cal BC 7460 ~ 6670

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25(‰) に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率) と 2 σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1

$\sigma \cdot 2 \sigma$ 値が表記される場合もある。

文献

- Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

II. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、各遺構から採取された炭化材 2 点である。

3. 方法

試料を割削して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を複製し、落射顕微鏡によって 50～1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

《遺構名》	《結果(学名/和名)》	
SI-2	Acer	カエデ属
SI-19	Quercus sect. Prinus	コナラ属コナラ節

以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が 1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15m、径 60cm ぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

カエデ属 Acer カエデ科

横断面：小型で丸い道管が単独あるいは 2～4 個放射方向に複合して散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で 1～6 細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ 20m、径 1m に達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

5. 所見

分析の結果、コナラ属コナラ節 1 点、カエデ属 1 点が同定された。

コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。カエデ属も温帯に広く分布する落葉広葉樹である。

文献

- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造. 文永堂出版, p.20-48.
佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造. 文永堂出版, p.49-100.
島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧. 雄山閣, p.296
山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成. 植生史研究特別第 1 号. 植生史研究会, p.242

調査抄録

フリガナ	ヌメリカワ ダイニ				
書名	滑川第2遺跡				
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書				
巻次	第1集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第22集				
編集者名	井田篤・秋成雅博・今村結記				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引 204 番地				
発行年月日	2007年1月				
所在遺跡名	所在地	市町村：遺跡番号	北緯	東経	調査期間
滑川第2遺跡	清武町大字船引字滑川	清武町：210	31° 52' 28"	131° 22' 13"	97.8.1 ~
					98.3.31
					98.5.6 ~
					99.3.31
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
10420 m ²	農業関連	集落	旧石器 縄文(早期・前期) 弥生・古墳 古代	礫群 集石遺構 土坑 竪穴式住居跡 など	石器 縄文式土器 弥生式土器 土師器 など
特記事項					
アカホヤ火山灰層を挟んで上下の文化層から貝殻炭痕文土器が出土している。 南九州最大級の姫島産黒曜石製の石核が出土している。					

清武町埋蔵文化財調査報告書 第22集

滑川 第2遺跡

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書

発行年月日 平成19年1月31日

編集発行 清武町教育委員会
〒889-1696 宮崎県宮崎郡清武町大字船引204
TEL 0985-85-1111

印刷 有限会社宮崎青写真工業
〒880-0013 宮崎市松橋1丁目6-36
TEL 0985-29-6138 FAX 0985-29-6715

